

---

# 奇跡の法則

めろん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

奇跡の法則

### 【Zコード】

Z9960X

### 【作者名】

めるん

### 【あらすじ】

はじめまして、じゃない方もいるかもしれません。

この小説は魔法少女リリカルなのはの世界観にオリジナル要素を取り入れた作品です。

実は昔あるサイトで公開していたものなので、見覚えのある方がもしかしたらいらっしゃるかもしれません。

最近忙しさがましになってきたので、続きを書いていくことに決断し

ました。

よろしくお願ひします。

時系列は闇の書事件から六年後。

A - s } S t r i k e r s の間のお話です。

2011 - 10 - 28

## プロローグ

奇跡。

そんな言葉が、この世界には存在する。

人はそれを「希望」の象徴だと信じ、自ら求める者が多い。

奇跡的な回復。

奇跡的な勝利。

奇跡的な解決。

奇跡的な進化。

奇才。奇特。奇知。奇骨。

そんな足跡が奇跡である、と。

が。

しかし。

奇跡という言葉には、決して希望ばかりが含まれていてはいけない。表があれば、裏がある。

表があるから裏がある、と言い換えてもいい。

少なからず、負の要素を孕んでいる。

負の要素が潜んでいる。

奇跡的な衰弱。

奇跡的な敗北。

奇跡的な破綻。

奇跡的な死。

奇怪。奇異。奇禍。奇妙。  
そんな足跡も奇跡であろう。

と前置きをしたところで、これから語るのはそんな奇跡のお話。

希望の奇跡なのか。  
絶望の奇跡なのか。

決めるのはあなた次第だ。

ただ一つ言えるのは。

奇跡なんてものは唐突に、何の前触れもなく訪れるところだ。

さて。

それでは始めようか。

いくつもの出会いが奇跡を紡ぎ、ある軌跡へと収束する。

そんなありふれた、日常の物語。

## あの日の時

6月3日。

じめじめと不愉快さが増す季節だが、それでも世間の学校はお構いなしに登校日である平日。

梅雨に入りかけの時期でもあり、只でさえ氣だるい朝をいつそうと辛いものにする。

「雨、降るかな?」

通学路。

ぽつりと弦く少年もまた、例に漏れず学校の制服を着用していた。

私立桜波中学校 地元ではわりと有名な進学校である。

少年の名は、神崎 木葉。

真っ直ぐに伸びた綺麗な黒髪と端正な顔立ちには到底似合わない、ふてくされたような表情を崩さずに歩を進める。

「天気予報見なかつたの木葉? 午後から90%だつて言つてたよ

その隣を歩くのは、木葉よりも頭一つ分背の低い少年。

木葉自身そんなに長身ではないため むしろ一般平均よりも低い

その少年の背の低さがうかがえるだらう。

「いや、さつき起きたとこだからや」

「……相変わらずだなあ。だいたい予想してたからさ、傘一本持つてきてるよ」

「ああ。悪いな、ひで」

南坂 秀。

木葉と同じ、三年生を示す赤色のネクタイをしていなければ、小学生と言つても通じそうな体躯だ。

彼は幼なじみの平然とした態度を見て、軽くため息をついた。

「本当に悪いと思つてる?..」

「思つてるや」

「それじゃ、いきなりクーディズ。木葉の家に僕の傘が何本あるでしょうか?」

「.....8本くらい?」

「.....」

「いめん。実は何とも思つてないんだ」

「だらううね。知つてる」

ちなみに9本ね、ともう一度、今度は深くため息。

それから特に会話もなく、こつもの通学路をゆくへつと歩いた。

時間にして約5分。

桜波中学校の印である桜並木が田の前に広がつてへる。

「んっ？」

「どうした？」

と、突然首をかしげる秀の視線は校門とは逆の方向へ向けられている。

「うん、今日は一人足りないなーってね」

その先には、4人の少女たち。

「ほら、サイドポニーの子」

「……ああ、ほんとだ」

いつもは5人で登校する彼女たちは、桜波中学校の間でも大きな話題の1つになっている。

なんと言つても、個々人の容姿レベルが格段に高いのが原因だ。

私立聖祥大付属中学の制服に身を包んだ彼女たちは、桜波の中では『聖祥レンジヤー』とか、なんとも言えない　率直にいえば痛い　俗称があつたりする。

毎朝、桜波中学前の桜並木で待ち合わせをするらしく、その時間に会わせて登校する連中もいるほどの人気ぶりだ。

「5人中全員が可愛いってのはあれだよな、『毒をもつて毒を制す』つてやつ」

「いや、『類は友を呼ぶ』でしょ」

「同じだろ」

「一コアンスがかなり違つんだよ」

と2人が軽口をかわしていると、4人はすでに反対方向へと歩いてしまつていた。

「結局5人目はこなかつたね。……『聖祥ピンク』だつけ？」

「みたいだな。俺には何の関係もないけど」

関係したくても無理だ、と興味無さげに校門をくぐる木葉と、それを急いで追いかける秀。

しかし。

木葉のつぶやきは、本人の知らないところでひつくり返されることになる。

それとは歩みを逆にする4人の少女たち。

「あの人でしょ？あんたたちが言つてたのつて」

歩き始めてすぐに、1人の少女が話題を持ちかけた。  
日を受けて輝く金の髪。

すこし翠の入った瞳からは、勝気な性格がうかがえる。

「やつやよ。神崎木葉って言つたかな

それに答える茶髪の少女は、今来た道を軽く振り返りながら言つた。  
すっかり緑に染まつてしまつた桜の木々のなか、ちょっと話題にあ  
がつた少年が校門をくぐつたところだった。

「なんやアリサちゃん、興味あるん?」

ニヤリ。と獲物を見つけたかのように口を吊り上げ、アリサと呼ば  
れた少女へ視線を戻す。

「なつ、ち、違うわよ! 昨日からフュイトが何度も嬉しそうに言つ  
てたから気になつただけ!」

「ほう、そらフュイトちゃんに詳しくお話ししてもらわななー?」

「あ、アリサ! ?違うんだよ? 私はただ、同じ歳の仲間が増え  
が楽しみなだけで……ね、はやて?」

「んー。なんや、つまらんなー」

桜波中学校とは逆方向の通学路。

3人の少女たちが歳相応の色恋話に会話を弾ませる中、1人だけは  
どこか複雑な表情を浮かべていた。  
まるで何かを案じるような、慈悲深い瞳で。

「どうかした? すずか

そんな態度にはじめに話をふつた少女、アリサが気付き少し心配そ

うに尋ねる。

「ひ、ちよっとね。その男の子も大変だなーって」

ああ、確かにね。

と納得したアリサは反対側のフェイトに顔を向ける。

「えっと、フェイトのお兄さんが見つけたのよね？」

「やうだよ。クロノも同じようなこと書いてたなあ」

追憶。

三日ほど前のこと。

クロノ、といつ青年が作成した報告書には、こんなことが記されていた。

### 第97管理外世界『地球』

闇の書発見のこの地において、魔力を持った少年を発見  
その反応は緊急を要するほどではなく、警戒は不要かと思われる  
しかし、場所が場所であり念のためにしばらくの監視を決定  
1ヶ月の監視の後、何もなければ少年を管理局で保護

その際、改めて彼の処遇を決定する

「でも、なんで保護しなきゃいけないのかな? 何もなかつたらその

まあでもここんじや……？」

すずかの表情は一行に晴れる気配がない。

フェイトもそれに同調するかのよつて、声のトーンが少し下がった。

「本当に監視もいらないくらいなんだけど、この海鳴市は『そついつ』とが起きやすい場所らしくて。だから変なことが起きちゃう前に、本人に理解しておいてもらひたまうがいいだらう、つてクロノが」

「クロノくん、真面目さんやからなー」

暗くなつてしまつたその場の空氣を変えよつて、せやはわざと暗るご口調で話をつなぐ。

「すずかちゃんは、なにがそんなに心配なんや?」

「……だつて、知つてるから。なのはちやんがすげえ大変だつたこと

今この場にはいない、もう1人の親友を思つ。それは、まだみんなが小学生のころの記憶。

「や、やつこえば、なのはは今日お仕事だつて?」

そのことに際して少し恥ずかしい思い出をもつアリサは、何とか話題を変えようと慌て氣味に尋ねる。

「うそ、お前に学校に来ゆつて」

昔その話を聞いたことのあるフヨイトは、アリサの意を察したのかクスクスと笑いながらそれに返す。

そんな対応に少々顔を赤らめたアリサは、そっか、とだけつぶやいて再び前を向いた。

本日の天気は曇りのち雨。

今も空は淀んだ色に包まれているが、この4人の間は暖かい雰囲気で満たされていた。

平和な日常。

今思えば。

それは、嵐の前の静けさだったのかもしれない。

## 始まりをあげよ

「今日は言わないんだね、『面倒くさい』って

昼休み。

午前の授業を消化し、午後の授業へと移行するまでの長い間で短い安息の時間。

木葉の席までやってきた秀がまず放った言葉がそれだった。

「お前や、わざわざそれ言いたに来たの？」

「そんなわけないでしょ。『飯食べよ？』

新学年が始まって2ヶ月ほどが経つ教室内では、すでに皆々の所定位置が決定していた。

木葉と秀。

この2人が一緒にるのは1年生のときから変化なく、今日もまた例外ではなかった。

「どう、何か理由でもあるの？」「つでも暇を見つけては言つて居葉なの」「

「そんな執念は持つたことねえよ

口癖を言つタイミングを見計らつなんて。

それはすでに口癖ではないだろう。

弁当に箸をつけてすぐ、「これもいつも通りの他愛ない会話。

それは、2人の中ではすでに日常の一つになつていてる。

「何となくだけだ、今日は面倒くさそうなことばかり起きるような気がしてさ。溜めてるんだよ」

「回数制限あつたんだ……」

呪いみたいだね、と苦笑。

「ちなみに今日の『面倒くさ指数』は

「基準がよくわからないよ。80ポイントくらい?」

「3テラ」

「ハイスペック!?

単位もケタも違った。

「な?溜めてないとやつてけないだろ?」

それと時を同じくして、聖祥大付属中学。

屋上で昼の一時を過ごす4人は、つこさつき学校にやつてきたもう1人の親友を迎えていた。

「お疲れさま、なのは」

高町なのは。

聖祥ピンク。

彼女もまた、人気が出るのが十一分に納得できる密姿をしてくる。

「ありがとう、フロイトちゃん」

その顔つきに似つかわしい太陽のような笑顔も、彼女の魅力を上げるのに手伝っているようだ。

「そんで、今日は何のお仕事やったん?」

「んとね。アースラ組の代表として、クロノくんと一緒に本局に呼び出されたんだけど」

なのはの母親がフロイトに預けていた弁当を受け取り、はやてが横に詰めてくれたおかげでできたスペースに腰を降ろす。

いつ雨が降つてもおかしくないような天氣の中、それでも屋上で昼食をとるのは、彼女たちに何らかのポリシーがあるのだろうか。

「ちょっと、変なんだよね」

「変って、どんな風にや?..」

えっとね、と左手を軽くあいに添え、悩ましげな表情を浮かべるなのは。

それは、今朝のすずかが見せたそれによく似ていた。

「アリサちゃんとすずかちゃんは、『神崎木葉』くんのこと……」

「ああ、それなら今朝詳しく述べたところよ」

「うん。その男の子も大変だつて話だよね」

それなら話が早いね、と一息。

「クロノくんが報告書を提出したら、本局から緊急指令が出たの。内容は、『神崎木葉の即時保護』」

「えつーー？」

突然のことだ。

その話からだけでは、疑問しか生まれない。なぜ、の一点張りしか。

「クロノは、1ヶ月くらいは様子見だつて……」

「その予定だつたんだけど、私も詳しいことは何も

つ

刹那。目の前からアリサとすずかが消えた。

「なつ、つー？」

否。

消えたのではなく、逆だ。

なのは、フュイト、はやて。

魔術師である3人だけが、世界から切り離されたのだ。

「これは 結界つー!？」

そして。

ここにも1人、世界から分断された者がいた。

「ほらな……」

目の前で弁当を食べていたはずの秀が、教室中の全員が、消えた。少なくとも、彼の目にはそう映った。

「やっぱり、面倒くさくなつた

窓の外では、雨が降り始めていた。

「3人とも、聞いてくれ」

蒼白い幻想的な空間に取り残された3人の眼前には、空中に展開された電子パネルが浮かんでいた。

それに映るのは、彼女たちの恩人とも言える青年。どうやらテレビ電話のようなものらしい。

「クロノくん、この結界は？」

少しづつ降り出した雨が彼女たちの肌を濡らすが、そんなことは気にしていられない。

今現在の最優先事項は、状況の確認。及び、打破である。

管理外世界での魔法 結界の使用は余程のことが無い限り許可がない。

厳しい罰則が生じるのは周知のことだ。

「いや……だが、ある程度の予測はつく」

「神崎木葉くん、やね」

そういうふた状況下で何のためにもなく魔法を使用するものは限られた者。

自己防衛、もしくは 犯罪目的。

「そうだ。本局からの緊急指令は、このことを察してかもしけない。確証はないが、神崎木葉には『何か』あるとみていいだろう」

「じゃあこの結界は木葉くんが？」

単純に考えればそうなるだろう。慣れない魔法の誤作動か何かか。

それが最も妥当な線だ。

そう、思いたかった。

「いや。結界は何の知識もない者が扱えるようなものじゃない。それに、魔力の質が違いますから」

この結界が木葉のものじゃないならば。  
考えられる可能性は、一つしかなくなつてしまつから。

「……クロノ、彼は今どこに？」

「学校にいたが、自宅の方へ向かつていいようだな。結界で情報がジャミングされてしまつていてるせいで、詳しく述べは掴めない。パッケージの自宅で待ち伏せてくれ」

待ち伏せ、とどこかこちらの方が犯罪の匂いがする単語に、フェイトは苦笑する。

「それじゃあ、いこうか

いろんなことがあった。  
だけど、乗り越えてきた。  
この3人で。  
今回も、きっと。

そんな確信があるからこそ、2人は笑顔でうなづく。

「いくよ、レイジングハート」

そして、呼ぶ。

「いけるね、バルティックシユ」

自分の、相棒の名を。

「いくで、リインフォース」

家族の名を。

『セット・アップ!』

3人は、空を駆ける。

「面倒くさ」

平日の真つ昼間。

いつもはちらほらと見える人影が一つもないのは、異常といえた。

「ああ、一回使っちゃったよ」

まだ溜めとかないと、と軽く言つが内心にはかなりの焦りがあった。

「……黒魔術、呪い、夢、幻術？現実的じゃないな」

あながち間違つてはいない予想で、思考は自己完結。

とりあえず家に帰つて寝さえすれば元に戻つてはいるだらう、という樂観的な考へだが、そこには悪夢しかないことを、木葉は知らない。

対して、魔術師の3人はすでに神崎家に到着していた。そのまま指示通り木葉を待ち伏せようと思っていたが、

「……今、中から音しなかつた？」

「うん。何か物音がするね」

ほんの微かにだが、人の気配を感じる家の中。それに耳を澄ませていると突如、ひと際大きな音がした。

何かが倒れるような、嫌な音。

「帰つてきてるんやろか？」

だとしたらすぐ順応性だね、となのは。

「それじゃあ、入つてみ 「その必要は、ありませんよ」

フェイトが一步足を進めた瞬間、その声は1人の少女によつてかき消された。

とても澄んだ、透き通るような声。

「あ……」

もし神崎木葉が今回の事件に関与しているのなら、ここにいるのは

彼女たち以外に一組しかいない。

木葉と、結界の首謀者。

目の前にいるのは、明らかに後者だ。

その彼女が、目的の家から普通に出てきたのだ。

ふらつと、買い物に行くかのように。

「えつ……」

だがしかし、驚愕すべきはそこではない。

彼女の美しく魅惑的な純白『だったであろう』ドレスが、何かで赤黒く染め上げられていたのだった。

# 君の罪は

少女のドレスを染め上げているのは、まさしくそれだつた。足元から首の上まで、いくらかは顔にまで付着している。それだけの血を流せば、その持ち主だつた者はすでに

「そ、その血……まさかっ

いくら多くの死線をくぐり抜けてきた彼女たちとて、さすがに冷静を保てる状況ではなかつた。

「神崎、木葉くん、の」

実際、ひどく声が震えているのが自分でも分かる。

つにせつ 今まで生きていた彼が。  
ふうの罪もぬい皮、ガ。

仲間になるはずだった彼が。

「神崎、木葉……？」

しかし、少女は平然と、そして悠然とした態度で言葉を紡ぐ。

「ああ、アゼンの」とですか

「アーチャー?」

はい、と頬の血を右手で拭う。

そんな仕草一つにも、どうか気品があるように見えてしまった。

「あなたのこと、情報として受け取っています。Bさん、しさ  
ん、それからDさん」

なのは、フロイト、はやての順に血を拭つた手で指を指しながら言  
い放つ。

ぽつり、と地面に立つ。

何の情緒もなく幾多のシミを作り上げていく

「初にお田にかかります。私は…………そうでした。まだ今回の名前をもらつていませんでしたっけ」

そのまま手に付いた血をペロリと舌ですくい取り、3人の前に出現した電子パネルに目を向ける。

「されば、おまえさん」

「エセんなんて呼ばれる筋合にはないが。まずは話を聞かせてもらひ

そこにはクロノ、そして情報管理及び参謀のハイミィも映し出されている。

「いえ、あなたはGさんです」

「じ、ぢにー? Fでさえないのかー!?」

「クロノくんー?今はそれどじやないんでしょー.」

予想外の認識に動搖するクロノを、ハイミィ Eさん が慌てて叱咤する。

せっかくのシリアスな雰囲気ぶち壊しだ。

「つと、すまない。おほんつ、取り乱した」

だがそこは、さすが執務官といったところか。すぐに真剣な表情で話を戻す。

「Jの結界は君のものだな。いつたい何の目的 「おいおい

だがそれも、もう一人の来訪者によつて中断することになつた。その場の全員が動きを止める。

「いつたいどうこう状況だよ、これは」

神崎木葉、その人である。

特に焦つた様子もなく、Jへ自然にそこに存在していた。

「あ……え、なんで生きて?」

「いや、初対面から失礼すぎるだろ」

面倒くせ、と溜めていた一回分を無意識に使用し、何故かここにいる『聖祥レンジャー』を見つめる。

「とりあえず聞くぞ。今この状況は何だ？ 何で人が消えた？ この変な空間を作ったのはおまえらか？ そもそも……」

「え、えっと…… そんな一度に言われても」

木葉の矢継ぎ早な質問にうまく対応しきれないなのは、フェイトやはやて、そしてクロノも展開の早さに思考が追い付いていかない。

「来ましたか、Aさん」

そんな中、赤い少女だけは違った。

瞳はしっかりと木葉を捉え、離さない。

対して木葉は、それにただ訝しげに視線を合わせる。

「やつと、役者がそろいました。それでは言伝をお伝えします。きっと、Gさんの質問の答えにもなるはずです」

そのまま田を閉じ、台詞を思い出すように話しだす。他の者はそれを、何をするでもなく見つめていた。

『【運命の歪曲者】<sup>フレイク</sup> 高町なのは

【造られた禁忌】<sup>クローン</sup> フェイト・A・ハラオウン

【闇が溶けし力】（デッドライン）　八神はやて

そして、

【決定事項】（オールレーティ）　神崎木葉

私たちは【管理局の管理者】と申します

率直に申し上げますと

あなた方の存在はこの世界の維持に対する反逆です  
存在が罪なのです

よつて、あなた方には初めから『なかつたこと』になつていただく  
こととなりました

『了承ください』

田舎、開ける。

「つまり要約するのですね……

すっぽり、すっぽり、まつたり、くつせり、しつかり、はつきり、  
あつせり、

死ねよ

「 」

色々ふつとんでやがる。  
木葉はまずやう思つた。

不可思議な蒼白い空間。

『聖祥レンジャー』の妙な出で立つ。  
空中に浮かぶパネル。  
そして、赤い、紅い少女。

「それだけでも容量いっぱいなんだけどな

加えて、少女は何と言つた?

『【決定事項】（オールレディ）神崎木葉

死んでください』

「本当に、面倒くさい」

「……木葉くん？」

そして木葉を支配するのみ、他の何でもなく。怒りだ。

何をしたわけでもなく、おかしなことで巻き込まれた。理不尽だ、と一言。

「IJの際、IJの状況に対する疑問はどうでもここ

そして、

「そろそろ限界だ」

駆け出す。

疾走。

風を受けながら全力で踏み込む。

相手が子供だ、女だといつ認識はある。

だが、こんな状況を作り出したであらう者に対する配慮など、なかつた。

軸の左足を踏み込んだ時には、もう少女の目の前に立っていた。

「まずは一発、ぶん殴ってや

」

が、その言葉が最後まで紡がれることはなかった。

気付けば進行方向とは真逆に、抵抗など皆無に吹き飛ばされていた。

腹部に痛みが走り、溜め込んでいた空気が吐き出される。

「あまり、私をなめないでください」

少女はその場から動いていなかつた。  
しかし、彼女の周囲には蒼い光が3つ、たゆたうように浮かんでい  
る。

その一つが、木葉の腹部へ投擲されたのだ。

「……なんだよ、それ

肺の中の酸素を根こそぎ持つていかれた。  
すぐに立ち上がる状態ではない。

「先程は死ねと言いましたが、あれは間違いでした。訂正しましょ  
う」

「私が、あなた方を殺します」

殺氣　そんな言葉では言い表わせない。  
毒氣、といった表現が近いだろう。

目に見えない圧力に、なのはも、フェイドも、はやても動けずにつ  
た。

辛うじて動くのは、口だけだ。

パネル越しのクロノは啞然の表情。

見た目10歳ほどの少女が、こんな気当たがができるのか、と。

「なんで、こんなこと……」

「言いましたよね。あなたは反逆者です」

「ゆっくりと、近づく。

「ならば、『戻えられる制裁は『死』なのですよ」

手を伸ばせば届く距離。

「世界にかわってお仕置きです」

そんな位置で少女は右手を天に掲げ、一気に振り下ろすことはできなかつた。

瞬時に振り返り、自分に向かってきた何かをたたき落とす。

「おい。あんまり俺を、なめるなよ」

神崎木葉。

彼の周りには、少女と同じくいくつかの光が浮遊していた。先に少女に弾かれたのも、その中の一つ。

色は異なり、白銀。

「これ、俺以外にもできるやつがいたんだな。びっくりで固まつちまつたよ」

同時に、3人は少女からバックステップで距離をとる。少女の注意が木葉に向かったからだらうか。彼女たちの足は、すんなりと動いた。同時に武器を構えるのも忘れない。

「びっくりしたんはこっちの方や。木葉くん、もう魔法使えたんやね」

「魔法? これが?」

「自覚はないんだ……」

はやての言葉に、惑う木葉が少しおかしく、フエイトはこんな状況にも関わらず笑ってしまう。

「覚醒済み、ですか」

そんな中、少女は一度驚愕の表情を浮かべた後、何かを思案するように首を傾げる。

「『あの方』の話と少し似ていますね……やはり、完成とは言ひがたいですか」

何かが狂っている。

精巧に作られたはずの歯車が噛み合っていない。

そんな訝しげな表情。

それが何なのかは分からないが、今が好機だと木葉は悟った。

「たぶん、おまえらも同じようなことできるだろー? 今のうち、遠慮なくぶち込んじまつぞー!」

白銀の光の数が増える。

その数5つ。

「クロノくん！」

「ああ。相手の戦闘意志は明白だな」

そして3人も、それぞれの光を生み出す。

なのはは桃色。

フェイントは金色。

はやては白色。

数は、実に木葉の3倍以上。

なのはにいたつては、数える事さえも億劫なほどだ。

「これより、戦闘による撃墜を開始してくれ」

## 残つたもの

### 撃墜

急速で急激な展開に、頭が着いていかない。

ともかく。  
体は動く。

戦闘、開始

「中止ですね」

少女の周囲の空間を埋め尽くすよう設置される様々な色の光を一  
瞥して、つぶやいたのはそんな言葉。  
これには、その場の全員が動揺を禁じえなかつた。

「聞こえませんでしたか？中止、と言つたのですよ」

動きが止まつた木葉たちを見て、呆れたよつて肩をすくめる。  
そして一番に動いたのは、やはり木葉。

「ふやけんな」

少女に向かつて駆ける白銀。

それは問答無用に少女の意識を刈り取ろうと迫る。

「少々、へやいです」

しかし、白銀は当たるやうに途中でその方向を変え、四方に霧散

してしまつ。

「リリで消えてもらおうかとも思ったのですが、Aさんが魔法を使えるとなると話は別です。『あの方』に報告しなければいけませんので。

……はあ、面倒くさい

「 う、俺の台詞を、パクんじゃねえ！」

怒り。

それはある意味、周りを見えなくさせる魔法。

新たな白銀を生成した木葉は再び少女へ投擲するが、結果は変わらず。

かすめる」とさえない。

「くわッ……おーーーおまえらもやれ！」

最初とは違う木葉の激昂した声で、3人はよつやく我に返る。

「う、うんー」

返事と同時に、数十もの攻撃が少女を襲う。

壊れた花火のように光があふれ、目で追えないほどの速さで直進する。

が、それもまた届く前に方向を変えてしまった。

「うわーー？」

「無駄ですよ。私の魔法は少々特殊でしてね。空間を『歪める』のですよ

このよう』、と右手を木葉たちに向か、一気に閉じる。

刹那、田の前の景色が文字通り『歪んだ』。

バットを額に当てる、100回ほど回った後のよつた感覚。立つてこねるとありできず、座り込んでしまつ。

「いんな、いとつ……」

「認識を間違えないでください。私は『逃げる』ではなく、『今回は引く』と言つたのです」

雨がさらりと激しくなる。

少女にべつとりと付いていた血はある程度流れ、それをドレスの模様のようにに滲んでいた。

「待て、全然答えになつていない！」

急いで止めるのはクロノ。

「君の目的がなのはたちの抹殺だとしたなら、普通に『まぢしておいてあつさり引きはしないだろ』。君の本当の目的は、別にあるはずだ」

歯がゆい。

パネル越しにしか発言できない立場に、クロノは激しくやつ思つた。

「そうですね。あなた方の抹殺は、【管理局の管理者】の最終目的ですか。』

今回の最優先は、他にありました

少女の足元に、光が集まる。

光は円形の幾何学文様を型どり、そのまま体を包み込むように光が上昇。

「それは先程完遂しましたゆえ、今回は引かせていただくと言つているのですよ」

ドレスの両端を軽く持ち上げ、一礼。  
それだけで絵になるように美しく。

「また、お会いすることは【決定事項】です」

そして、そして、

「今日は、これにて」

後には、何も残らなかつた。

意図がまったく読めない事件だった。

なのは、フロイト、はやて、そして木葉にこれといった外傷はなし。

さて。

神崎木葉の保護は、事件の後すぐに行われた。

そのまま魔法関連の話 木葉の素質の話を伝えると、ふーん。と  
ただ一言だけが返ってきた。

これから魔法の力とどう向き合っていくかは、彼の判断に委ねるつ  
もりだ。

最後に。

今回の事件の損失を報告しておこう。

死亡者、一一名。

神崎葉巻。神崎落葉。

これにより神崎木葉は、15歳にして天涯孤独の身となつたのだった。

事件からすでに1週間が経つ。

それは、木葉が答えを出すまでの期間。

関わるか否か。

それはどう考へても、短すぎる猶予期間だった。

ただ。

今のところ、毎日は相変わらず日常だ。

「ねえ木葉、放課後カラオケいかない？最近暇でさー」

それを象徴するように、木葉に対する南坂秀の態度に変化はなかつた。

だからこれは日常。平凡。素朴な日々。

そう思いたかったのだがしかし、大半は違う。

『強盗殺人事件』

木葉の両親の死が表向きにはそう公表されたのが原因だろ？  
周囲から向けられるのは、好奇の視線だ。

「ひで、ちょっと来てくれ」

「あ……うん」

木葉は秀の提案に答えず、逃げるようにして教室を出た。  
呼ばれた秀もただそれに従う。

着いた先は、屋上。

そこには2人以外誰もおらず、周りの目を気にする必要のない場所だ。

泣きたいくらいに辛いんだろうな、と秀は思つた。

両親が殺された時の感情なんて味わったことないが、からうじて理解はできる。

だからこそ、親友である自分にだけは弱さを見せてくれるのだろう、

と。

「あのや」

しかし。

「少し、やりたいことができたんだ」

「…………は？」

そこまで告げられたのは、驚愕の言葉だった。

何のこと?とか。

両親のこと?とか。

そんな単純な驚きではない。

『あの』神崎木葉が。

小銭を落としても面倒だ、と拾わない木葉が。

電気を消すのが面倒だ、と明るいまま寝てしまう木葉が!トイレに行くのが面倒だ、とその場で用を足す木葉が!!

……ですがに最後のは想像だが。

「えつとさ、それ、何かの冗談?」

「…………いやまあ、そう言われても仕方ないよな」

久しぶりの晴天の空には似合わないため息。

秀は驚きを通り越し、逆に冷静さを取り戻した。

「それって、おじさんとおばさんに関係あるのかな？」

「このときはかりは、秀が友である」と木葉は後悔した。察しが、良すぎるのだ。

「そういうのかもしない」

「わっか

「何も聞かないのか？」

「説明するの、『面倒くさい』でしょ？」

「…………」

だが。

秀はやはり、親友だった。

誰よりも、何よりも、ただ向き合ひてくれる。

「たぶん学校にはしばらく来れないから、ひどだけには『うひうひ』と思つてね」

「うん。ありがと」

「おまえはお礼言われる側だろ」

「違うよ。あの木葉が、支えてしてくれたんだもん。僕は嬉しい

だよ

「……ここだけ聞いたら、結構危ない会話だよな

木葉は笑つた。

親友とは笑顔で別れたいと思つたから。  
不思議と、面倒くさいとは思わなかつた。

「がんばってね、木葉」

「ん、ちょっとこつこつくる

決心したのは、力を持つこと。

それは、復讐などではない。

そんなことは考えてもいないし、考えたくもない。

ただ。

自分で何かが動いた。

関わつてみるべきだという、大きな確信。

理由なんてない。

そう、思つただけ。

生まれて初めてのこの感覚に従つてみよう。  
何かあれば、それから考える。

今はただ。  
この空を飛んでみたいと思つた。

## 真っ白なページに

意外と、おもしろい。

最初はただ面倒くさいと思つていた『新人研修』もとて、『魔導講義』とにかく勉強嫌い、というか机に向かうのが苦手な木葉は当初乗り気ではなかつた。どうして講義なんかを、とふてくされていたわけだ。経緯として、以下に1週間前の会話を記そつ。

「ねえ、木葉くん」

「ああ、何だ高町」

「なのは、でいいよ」

「いや、どうでもいいじゃん」

「……そうだね、関係なかつたね」

「で、何だ高町」

「……」

「高町?」

「…………」

「…………何だ、なのは」

「あのね、」

「関係大ありじゅねえか」

「何で魔法使えるようになつたのかなー、て」

「ああ。えつとな、夜中に田覚めたとき、電気付けるの面倒くさ  
いなーつて思つてたうさ」

「…………出たの？」

「出た」

「宝の持ち腐れだよ

「何となくだけど、自覚はしてた」

「えつと、それでね。今日から一週間魔法使用は禁止ね」

「あん?」

「私たちがちゃんと魔法について教えるから、それまでは禁止

「お勉強つひことか?」

「うん。がんばひつね

「…………」

「がんばりつけね？」

「…………うん」

なんてまあ、女の子とトの名前で呼び合つ素敵イベントを消化しつつ、お勉強会が強行採択されたわけだが。

しかし、実際に講義を受けてみると思つていていた以上に楽しい。

魔法の起源。

術式の相違。

戦術から時空管理局のことまで幅広く。

「とこつた感じで、今日でお勉強は終了です」

「はいはい。ありがとうございました、フェイド先生」

ともあれ。

実戦までの準備段階はこれにて閉幕。

あの少女の素性が詳しく述べるまでは研鑽を積んでおけ、というのがクロノ艦長からの通達だった。

「まあ基本的な戦い方は記憶してくれたし、後は実践で鍛えていく

うね

「そつなるな。そつこや、なのはとせやては？・今日は珍しくいなかつたけど」

講義程度ならわざわざ艦船アースラを使う必要はないとのことで、この1週間木葉はひたすらハラオウン家に足を運んでいた。塾のようなものだ。

「もひ、忘れたの？木葉の『デバイス調整』だって昨日言つてたでしょ？」

そう、『デバイス。

魔法を使うにあたつての演算能力補助装置。

軽く魔法を使用するくらいなら『デバイス』が無くともなんとかなるが、やはり戦いとなると高度で複雑な演算が必要不可欠になつてくる。

すべて、講義で教わつたところだ。

「デバイスか。案外時間かかるんだな」

「これでも急ピッチなんだよ？それなのに木葉がだだこねるから…」

…

当初、木葉には単に魔法を詰め込んでおく記憶媒体である『ストレージデバイス』が配給される予定だつたのだが、なのはたちの『デバイス』を見た木葉が猛反発。

AIを含む『インテリジェントデバイス』を所望したため、否応なく時間がかかってしまった。

ちなみに『インテリジェントデバイス』はそつ簡単に造れるものではない。

本来なら木葉の要求など瞬時に却下されるのだが、それでもクロノがしぶしぶ受け入れたのには、両親を亡くした、という木葉に対す

る同情が少なからず起因している。

「ちなみに、なんで『インテリジェントデバイス』が欲しかったの？」

「主には俺の代理人と、後は目覚ましとかに」

「最低だ」

艦船アースラ。

現在では時空管理局の地球支部の、Jとくなつている船の中に、木葉たちはいた。

「それでは、デバイスを与える前に、現段階まで分かつたことを説明しておこう」

そう切り出したクロノの前には、例の少女の映像が映されている。

黒髪に、蒼い瞳。そして真っ赤に染まった純白のドレス。

あの時はそんな事を考えている余裕などなかつたが、とても綺麗な顔立ちをしている。

「正直、【管理局の管理者】についての情報は一切ない。過去の事例も皆無だ」

ある程度承知していたが、見えない敵ほど怖いものはない。

最強と対峙するよつも。

不確定と対峙するほづがよつぱじ。

木葉は軽く舌打ちした。

「あのよ、時空管理団つてのは言つてみれば世界を支配してゐる訳だよな？それの管理者つてのは一体 」

「さあな。今のところ、ただの自称 「さつたり」とこつ線が有力だが」

苦々しい表情のまま肩を落とす。

一瞬の静寂の後、はやてがおずおずと手を挙げた。

「それやつたら私たちを殺す、言つたまひつなん？『世界の維持』とか言つてたな。それは名前で合つた言ひ草やつたけど」

「すまないが、それについてもまつたくだ」

3人の少女の雰囲気は重い。

それぞれ言われた事に対する想いがあるのだろう。

【運命の歪曲者】ブレイク

【造られた禁忌】クローン

【闇が溶けし力】デッドライン

どれも過去と因縁深いものばかりだ。

「だとしたら、『分かつたこと』つてのは？」

そして【決定事項】オールレディ、神崎木葉。  
彼にはそんな事を言われても思い当たる節がないのか、飄々としている。

しかし。

「神崎葉巻、神崎落葉」

死を迎えた彼ら。

クロノから放たれた言葉には、軽い気持ちでなどいられなかつた。  
「検死の結果、君の『両親』は魔力を持つていなかつた。  
つまり、あの少女が言つたとおり『意図的に』結界内にとり残され、  
殺害されたということだ」

それは、かすかな希望だつた。

もし『たまたま』結界内にとり残され、『たまたま』殺されたのだとしたら、木葉にも諦めがついた。

運が、悪かつただけなのだから。

「それつてよ……」

もし。

殺される確固たる理由があるとしたならば。

「俺のせい、つてことか？」

神崎木葉という存在が、悪かつたということなのだろう。

「……上層部の君への対応は異質だった。さらに、今回の件で確信したよ。

君には、『何か』がある

異質。異端。異能。異常。

両親を殺され得るだけの何かが。

「 」

不意に、耐えられなくなつた。

なるべく、できるだけ表には出さないようにしてきていた感情が、押さえ切れずに溢れた。

そしてただ、走つた。

目的地などなく、どこか1人になれる場所を求めて。

「クロノくん！そんな言い方つて 」

「僕だつて好きで言つたんじゃない！事実なんだ！」

知つて いる。  
その辛さを。

「……事実は、受け入れなければならない時が来てしまつ。それは、早いうちに済ませておいたほうがいいんだよ」

なのはは何も言えなかつた。

目の前の青年も、理不尽な理由で父親を失つた1人だから。  
だからこそ、その辛さが分かつてしまつ。

「私、木葉くんのところに」

「よせ、なのは。君が行つても慰めにはならない」

「……なんで？」

「今回の結界は『魔法関係者とその肉親』にまで対象範囲が広げられていたんだ。実際、君の家族も結界内にいた」

「うん」

「よく考えてくれ。今回、運が悪ければ君の家族までもが死んでいたかもしれないんだぞ」

「つー？」

「嫌な言い方だが、そんな賭けに『勝つた』なのはが行つても……」

「で、でも……」

見ていたくなかった。

もしくは、見ていたくなかったのだ。

1人の辛さは、なのはにも少しは理解できるから。

「なのは」

だがそこでなのはを止めたのは、意外にもフュイト。

「私に行かせてほしい」

「フロイトちゃん？」

彼女は、とても強い目をしていた。

「私にも、ちょっとは分かるから。木葉の気持ち」

「あ……」

かく言う彼女もまた、数年前に最愛の母親を亡くして、ずっと背負い込んできた一人だった。

「だから、行くね？」

「……うん。お願ひ、フロイトちゃん」

そんな彼女を、なのははやはては心から信頼している。もちろん、兄であるクロノも。

だから、黙つて彼女の背中を見送った。

走つて、走つて。

当てのないままに行き着いたのは、空が見える場所。とは言つても艦船アースラは宇宙空間に存在するため、馴れ親しんだ空は真下にあるわけだが。

「ああ。何やつてんだらうな」

暗闇の中に光るいくつかの星々。これもまた、空だと言えるのだろうか。

「……木葉」

そんな感傷的な背中に、小さな声がかけられた。柔らかくて、暖かな。声。

「フェイト、か」

涙を流している訳ではなかつた。

しかし。

必至で感情を抑えようとしている木葉はそれ以上に痛々しく見えた。

「ちょっと意外だな。なのはあたりが来るもんだと思つてた」

不敵に笑つて。敢えておどけてみせる。

だがそれも、フェイトを心配させる要因の一つにしかならなかつた。

「辛いときは、泣いてもいいんだと頼りよ~。」

「…………」

「なんてね。本当は、私も辛いの我慢してるんだ」

お互い様つてこと、とフロイトも木葉に令わせるように微笑む。そのまま木葉の隣に並び、暗い空を見つめる。

表面上だけでも笑つてみたい。

それがただの、強がりだとしても。

「……【造られた禁忌】ってやつ。聞いても、いいか?」

「うん。いいよ」

木葉の率直な質問に、思わず本物の笑みがこぼれる。

普通なら聞いてはいけないようなことなのだろう。それくらいは木葉にも分かる。

しかし、今の2人にそんな上辺の遠慮は必要ない。

お互いに分かつてしまつたから。

同じように悲しみ、苦しみを背負つていてことを。

「私ね、生まれ方が普通とは違つんだ。木葉はクローン技術つて知つてる?」

「ああ。……遺伝子技術だよな」

「母さんがその技術を完成させて、私を産んでくれた」

「どこか遠くを見つめるような目。

悲しんでこるのか、それとも懐かしんでこるのか。

「理由が、あつたんだろ?」

「やうだね。私は、死んじゃった娘の代わりだつたんだ。なんだが、けど……」

「その子の代わりにはなれなかつた、か

「やうみたい」

しかし田の田は、愛に溢れていた。  
強い、想いで。

「だけどね、母さんにはすゞく感謝してんんだよ」

返つてはこない過去。

それでも、涙は流さない。

自分で泣いてしまうのは卑怯だ。

「勝手に産み落とされて、勝手に嫌われてもか?」

「うん。それでも私は、私でいられるから。

なのはに助けてもらひて、はやてに田舎ひて、リンティ母さんとクロノに家族になつてもらひて。

たぶん、今が幸せなんだよ

綺麗だ、と思つた。

同じ年齢だとは思えないような妖艶な雰囲気と、大きく澄んだ目をする少女に、木葉は息を呑んだ。

「だから木葉とも、もひとつ仲良くなれたらいいな

「あ……ああ?、えつと、その……」

それは、願つてもない提案だ。

嫌な感じは、微塵もしない。面倒くさいことも思わない。

「うん。俺もだ」

だから、はつきつと。

共有したい、と思つた。

苦悩も苦痛も、歡喜も悦楽も。

フュイトだけではない。  
なのは、はやて、クロノとも。  
こんな感情はなつかしい。  
秀以来か。

「それなら、よつ仲良くなるための第一歩としてな

彼女たちになら、見せてもいいかもしない。

「うん?」

隠してきた、弱い自分を。

「とつあえず、一緒に泣いとくか？」

こうして。

木葉とフェイト。

2人は少しだけ、近くなつた。

暗幕。明転。

再び、アースラの一室に木葉たちが集まる。

「もう平氣なのか？……というかフェイト、なぜ顔が赤い？」

「えー？あ、いや……赤くなんか、ないよ？」

木葉と抱き合つて泣いてたからです、なんて実の兄 ではないが、  
義理の兄にも言える訳がない。

「ま、まさか……木葉、貴様が！」

だがフェイトの反応は、逆にクロノに勘違いをもたらすだけだった。

その勘違いはなのはとせやてにも派生し、じぢりも負けじと顔を火照らす。

「ふ、フエイトちゃん！私、そこまでお願いしたわけじゃ……」

「うわー、フエイトちゃんに先越されてもうたか

やはりここは普通の女子中学生の反応。つい先程までどんよりとしていた雰囲気が、一気にピンク、ヒートヒート混沌と化した。

「違うよーね、木葉。なんとか言って」

「早くデバイスください、お義兄さん」

「みみみ、認めないぞーー！」

シリアルも何もあつたものではない。

そんな状態の收拾に數十分を費やし、フエイトの必至な説得でなんとか誤解は解けた。

かに見えた。

「はあ、はあ……まあいい。いや、よくはないが、今はいい

が、結局は問題を先延ばしにしただけのようだった。

「気を取り直して、デバイスを『えるわけだが。木葉、君はこの力を何に使う？』

話を戻して。

これこそが、最大の懸念。

あんな話を聞かされた人間のとる行動など、

「復讐を考えるか？」

おおよそ検討がつくからだ。

「はつ

だが。

耳にしたのは、嘲笑。

「クロノ、おまえは俺のことを分かつてないな　まるで、分かつてない」

出会つてもう1週間だ。

それだけあつてまだ、俺のことを理解できていない。

「俺は復讐だらうが何だらうが、いつまでもつんだよ。

『面倒くさい』

自分でやりたくないと思ったことは絶対にしない。そして今までの俺の人生、やりたくない事ばかりだった。

だから、何かを『した』ことがほとんどないんだよ

木葉はこれまで、あらゆる事象から逃げてきた人間だ。  
向き合つたことなど、皆無に等しい。

「そんな俺が、自ら関わりにきたんだ。なのにわざわざ復讐?」

そんなもの。

「面倒くさいな」

だから、それはただの杞憂に終わった。  
終わつて、くれた。

「……いいだろ? この力を何に使うかは、君の判断に委ねること  
にする」

逃げしか選択肢に持つていなかつた木葉が、何かを感じ、魔法の力  
を得ることを選択した。

初めて何かを『したい』と思つた。

だから、クロノは手に収められた銀の指輪を木葉に渡すことに躊躇  
はない。

それがクロノの、彼なりの信用の証。

「これが、デバイス?」

『yes, my load. please call my name』

木葉が指輪を受け取ると、それが合図のよつてデバイスが起動する。

「名前……クロノ、こここの名前つて？」

「ああ、それならなのはやはやでが決めてくれたよ」

「どうか、と後ろを振り替えると、少女たちが笑顔で迎えてくれた。

生徒と先生の関係ではなく、同じ魔術師の仲間になつた。3人は、それが心から嬉しかつた。

「さつあ、木葉くんとフロイトちゃんが出てた時にな」

「うん。勝手に決めちゃつたけど、大丈夫？」

「平気だ。俺じや、ろくな名前を付けられないし」

そんな気がするよ、ヒロイト。

なのははそれを確認し、木葉の腕を取つて部屋を出てこいつをやる。

「こいつ、木葉くん…さくそく実践練習だよー」

「あひやー、始まつてもうた。なのはちやんの教導中毒」

なのはの代わりに、といった感じで、はやては木葉に手を合わせて謝る。

「いいわ別に。すぐに試してみたかったところだ」

「木葉、魔法の」とだけにはやる氣あるよね

だけを強調するな、とフロイトを軽く小突きながら、なのはは引きづられて訓練室へ向かう。

「で、ここでの名前は？」

優しい彼女たちの「」とだ。

きっと素晴らしい名前を付けてくれたのだろう。

木葉の期待が高まる。

「うん。 *Straiteness*、愛称はストラス」

「へえ、ストライトネス……なんかついいな。どんな意味なんだ？」

「和訳するといね、『眞面目くん』

「ただの皮肉じゃねえかよ」

「うーん」

開始から80分。

疲労で倒れた木葉を足元に、なのはは思索していた。

「特に秀でたところは、ないんだよね」

長距離支援のなのは、はやて。

近距離のフェイト。

2つのパターンに分けての適性検査だったのだが、どちらも芳しい結果は得られなかつた。

「長距離で支援できるほどの魔力、というか体力は無いみたいやし」「かといって接近戦でも体がついてこれてないよね」

手厳しい。

息絶え絶えになりながら、木葉は自分の甘さを認識した。

木葉の魔力は推定Aランク。

いきなりこの数値を叩きだすのはそこそこ優秀らしいが、いかんせん、目の前の少女たちが例外すぎた。

何せ、始まりがAAA+とかなんとか。ケタが違うどころか、格が違う。

「おまえたち……手加減つて知つてる?」

「あはは、『めんね。少し休憩にしようか。』フロイトちやん、はやてちやん、ちよつと」

もはや立つ氣力すらない木葉を置いて、なのはは2人を手招きする。会話が、木葉に聞こえない位置まで。

「2人はどう思う?」

「せつせつなのはちやんが言つたとおりや。特に抜きでてる要素はあらへん……けど」

「うそ。『田』が良さそうよね」

フロイトの言つ『田』はもちろん視力のことではない。

選別眼。観察眼。

常人では到底見切れないようなスピードの攻撃を、木葉は魔力付加なしで避けていた。

「違うと思つ」

しかし。

話をふつた当の本人はその考えを否定する。

「あれは『田』で見てやつてるんじゃないよ」

「え? うう」と、なのは?「

「実際、木葉くんは『田』では追いきれてなかつた」

人間の視界は360度ではない。  
当然死角というものが存在する。

が、木葉はそれさえもかわしてみせた。

「そやつたら、勘で避けたつてことか？」

「でも、それっておかしいよね。木葉はほんのちょっと前まで普通の中学生だったんだし」

眠っていた戦いのセンスが田覚めた、なんて話は漫画などでよくあることだ。

そんなことが、木葉に起きている?

なんて。

実際にはあり得ない話だが。

「あのね。これは私の推測なんだけど」

より声を小さく。

「木葉くん、最初は全然避けきれてなかつた。でも、回を重ねる」とにかわす確率が上がってきてるの」

回避訓練は、ほんの十数分程度。

「たぶん、木葉くんは私の攻撃パターンを読んできてる」

たつたそれだけの時間で人間1人のパターンが読めるとしたら。

「……かなりの切れ者ってこと?」

「本人に自覚はないみたいだけどね」

感心したように息をつくフロイトとはやで。

木葉のそれを見取つたなのはも、まだ信じがたいようだ。

「なら、オールラウンダーの策士つて方向もありやね」

「うん。 それならあの体力不足も補えるかも」

「本当に体力ないよね、木葉」

「……うん」

閑話休題。

育てる方向性が決定し、意氣揚々と木葉のもとへ。

「さつ、休憩は終わり。 次はもう少し本氣でいくよ。」

「あん? さつきの、本気じやなかつたのか?」

恐怖の声色。

だが、それには何故か期待の声も混ざつていていたようだつた。

「全然だよ? 訓練用にかなり出力抑えてるもん」

抑えている?  
あの強さで?

「うー」とは……」

そして、木葉は「やりと不気味に笑う。

「よし、一度本氣で俺に打つてくれ」

と言しながら示すのは自分の腹部。

「ええー、よし、じゃないよー。木葉くんはまだ魔力付加とかできないんだから、気絶しちゃうよー。」

「いいからー、確かめたい」とがあるんだよ。おまえらにもプラスになるぜ、たぶん」

かなり震えた声で言われても、説得力はないが。

「……もうー、知らないよー。」

「ちよ、なのはー、本当にやー」

時すでに遅し。

フェイントの制止もむなしく、半ばやけくそに光が放たれていた。

「うがんつ

そして期待どおりに命中。

奇妙な声を残して木葉は吹き飛んだ。

「ああ……なるほど……」

最後に意味深な言葉を置いて、意識は暗転。

「その……『めんなさい』

目覚めると、そこは病室　　という名の拷問部屋だった。  
睨みをきかせてくる3人が果てしなく恐ろしい。

「あのね、この世界には無茶つて言葉があるんだよ。知ってる?」

撃つた本人がそれを言いますか、と思ったがもちろん口には出さない。

願いでたのは、木葉なのだから。

それ以前に、言つたら地獄を見そうだ。

「重々承知します、はい」

だから、ここは下手に刺激しない。

木葉の人生の中で幾度となく使つてきた手段だ。

「……本当に分かつてる?」

「それはもう、神と仏に誓つて」

神仏習合である。

そんな様子から大分懲りたことを感じ取ったのか、3人の表情が少し和らいだ。

「もう……射撃系の本気だつたからよかつたものの、砲撃系なら気絶じや済まなかつたよ」

「あれよつ上があんのかよ……」

もしニコアンスを取り違えて『それ』を撃たれていたら、と思いつとぞつとしない。

木葉は訓練室で倒れた後、そのままアースラ内の病室へ移送された。その際なのははクロノに「うひびくお叱りを受けたので、今もまだ少しご機嫌ななめだ。

「あ、そういうや聞きたいことがあつたんだ」

「うん?」

そんななのはに代わつて、フェイトが応じる。

「魔法の色のことなんだけビビ、フェイトは黄色、つてか金色っぽいだろ?」

「うん。うだよ

「あれって、人によつて決まつてるもんなんのか？」

魔力光。

それは個々の区別認識にも使用されている。

「そうだね。本人の意志とは無関係に【決定事】……決まつてる」とだよ」

「いぢいぢ氣にすんなよ。今更だろ」

「うん。ごめんね」

それは、2人が近づいた際に決めたこと。  
互いに遠慮なく踏み込んでいこう、と。

「でも、それがどういう概念で、とかは分からんのだ」

なのはは桃色。

フェイトは黄色。

はやは白。

そして、あの少女は蒼白い幻想的な色。

だからこそ、結界を構築した者とあの少女が同一人物だと断定でき  
た。

「木葉は白銀、だよね」

「……ああ。へえ、そつか」

「それがどうかしたの？」

「いや、特にせ

軽く思案する木葉が、どうも腑に落ちないフヒイト。

そんな彼女を尻目に、木葉は勢いよくベッドから飛び降りる。

「よし。体に異常もないし、もつもつと歩くてくれるか？」

「ほんまに平氣なんやろおな？」

「平氣平氣。なつ、ストラス？」

《 a 1 1   r i p o c t .   l e t - s   a g o 》

そもそも、ストライトネスはまだセット・アップを済していない。  
一口体を実践に馴らしてから、だそうだ。

「あ、木葉くん…わざわざ氣絶までした意味、ちゃんと教えてくれ  
なきや…」

「やうだよ、木葉。私たちにもプラスになるつじづけないと…」

「ああ、それも平氣。ちゃんと分かつたから」

不敵な笑み。

それは、確信を持った者が見せる表情だった。

「例の少女の、強さの『ひ・み・つ』ってやつ」

「えー？」

例の少女、とはあの1週間前の人間だろう。

木葉の両親を殺した、あの少女。

「まだな

」

だが。

それは急に鳴り響いたアラートの合図に書き消された。  
目の前に、クロノを映したパネルが展開。

「1週間前と同じ反応が現れた。出られるか？」

「グッド、タイミングだ」

チエーンで首から下がっていたストライト・ネスを外す。

初戦が実戦になってしまったが、なんとかなるだろう。

そんな甘い考えができるのは、少女の強さの秘密を知ったから。

「行こうぜ。実際に見せてやるよ」

## 再会のひ、やよなり

白のアンダーシャツに、黒のロングスラックス。  
そして全身を覆つのは、ローブのような黒マント。

西洋の貴族を想起させるような格好に身を包み、木葉はあるジルの屋上にいた。

木葉だけではない。  
なのは、フロイト、はやで。  
そしてもう一人。

忘れたくとも忘れられないあの少女が、今度は汚れ一つ付着していない純白のドレス姿で立つていた。

前回と同じ服装。

それが少女のバリアジャケットの様だ。

「お久しぶりです」

艶のある黒髪に、深い蒼の瞳。

何もせず、ただ木葉たちを待つていたらしい。  
となると、今回の目的は

「世界を、修正しに参りました」

殺氣。

前回のよつて見逃してくれつもりはなによつだ。

対してなのはたちには、ある不安要素があった。

神崎木葉。

彼は、両親の仇を目の前に何かおかしなことを考えていないだらうか。

「名前」

しかし。

「あなたの名前、聞かせてくれるか?」

木葉はいたつて冷静を保つっていた。

「殺される相手の名前くらいは知りたい、ですか?」

「逆だな。初めて倒す相手の名前くらい知りたいんだ」

殺す、ではない。

倒すと言った。

それだけで、なのはたちには十分だった。

「無謀ですね。自分の弱さをまるで自覚していない」

そつ言つて、少女は微笑んだ。

それは皮肉だったのか、呆れだったのか。

どちらでもない、と木葉は感じた。

言つならば、なのはたちが浮かべる暖かい微笑みに近い気がしたのだ。

「いいでしょう。先日、今回の名前をドクターにいたいたばかりですしね」

そしてその笑みを瞬時に消し、無表情に戻る。

無機質、と言つてもいい。

そこからは何も感じられない。

「イリーン、と申しておきます。以後　後数分程度でしうが、どうぞお見知りおきを」

だが、話の通じない相手ではない。

それが分かった木葉は、少し安堵した。

「なのは、フェイト、はやて。おまえらは後方から隙を見て支援してくれ。

まずは、俺が突っ込む」

「本当に分かったんだね？あの子の力の秘密」

「ああ」

自信たっぷりな木葉の言い方に、3人はしっかりと頷いた。しっかりと、信頼してくれた。

だから、思い切り走る。

イリーンのもとへ、一直線。

「まずは、前のお返しからだ」

いつの間にか木葉の右手には、標準よりも若干長めの日本刀が握られていた。

西洋の貴族服に日本刀。

このいかにもなミスマッチが、持ち主の性格を的確に表現している。

向けるのは刃ではなく、もちろん峰。

「せっかく相談の終了まで待っていたのに、ただの突撃、否。突進ですか」

そして左の手のひらを木葉に向ける。  
あの時と、同じように。

「実に、ひざいです」

だが、形成されたものは違つた。

ただの歪みではない。

それは歪みに近い。

空間の、欠落。

「そこに空間は『存在』しません。疑似的なブラックホールのよつなものとお考えください」

イリーンは笑う。

先程のような微笑みではない。  
明らかに侮蔑の意が含まれる表情。

「触れれば、死にますよ?」

「 つ、木葉!」

フェイドの声。

止まつて、と叫ぶ暇もなく。

「たあつ!」

刀を振りかぶりながら、  
歪みの中へ、

木葉は消えた。

消えた。

と、思つた。

少なくとも、3人は。

いや、ここは逆に表現するべきだらう。  
残る『2人』は、木葉が死ぬはずが無いことを理解していた。

1人は木葉本人。

そしてもう1人は、イリーン。

人を、物を消すことのできる空間を作り出した　歪ませたはずの  
人物だ。

「くつ　」

しかし。

イリーンは、木葉にためらいがないと気付いた刹那、自分を守るよ  
うに両手を交差させる。

「　せやつー！」

丁度そこへ示し合わされたかのよう、日本刀　ストライトネス  
が直撃。

魔力で障壁が生成されるが、小さな体ではその衝撃は受け切れず、  
真後ろへ吹き飛んだ。

そのまま体はビルの一部に突進し、イリーンは瓦礫の山に埋もれて  
しまった。

それだけで済んだのは、しっかりとガードを作れたから。

では、なぜガードを作った？

木葉は歪みに触れたのに。  
死んだずなのに。

答えは明瞭、明快、明白。

空間を歪ませる力。

そんなものは存在しないからだ。

先程の空間も、ただの

「ただの、幻術だ」

空間歪曲魔法。

文字にするのは簡単だが、現実に表すとなると話が違う。

空間座標の掌握

空間位相の認識

この2つをこなした上で、空間に別の何かをねじ込む。

それが主な使用法だが、こんな芸当を人間が行うのはいさか力不足だ。

何もかもが、足りていない。

それこそが、欠如している。

「そんなめちゃくちゃな奴が、魔力が少ない訳がないだろ」

木葉が『それ』にはつきりと気付いたのは、なのはの射撃を受けた

じゃ。

「あの時。本気で殺しに来てたはずのおまえの一撃を受けて、気絶  
びこりかすぐに立てる程度の痛みだった」

瓦礫の中にいるはずのイリーンに話し掛ける。

ガードはしていたのだから、意識はあるだろ？

「そこ」で一つの仮説が推測された

なのはたちは、まだ何が起きたか理解できていなかつた。

「もしかしたら、魔力が少ないのを隠すための工作をしてるんじゃないかな？」

だから、木葉の言葉に耳を傾ける。

一言も聞き漏らさないよ！」

「射撃があんたに届かなかつたのは、不可視で広範囲のシールドを  
展開していたから。空間歪曲は幻術の類い。だと、したら」

瓦礫が、揺れた。

そのまま中から噴き出すように破片が飛び散り、中心にはイリーン。

「空間歪曲つてのは、安易に自分に近づかせないための『はつたり  
つてことだ』

綺麗だつたドレスは無残にも切り裂かれ、見る影もない。

「本当の確信を持ったのはさつき。突つ込んできた俺に、『攻撃』

じゃなく『待ち』を選択したときだけだな

「……正直、びっくりです。死ぬ前に見破ったのは、あなたが初めてですよ」

客観的に考えれば、答えはすぐに出たかもしれない。  
が、人間は恐怖に弱い。

空間歪曲、なんでものを目の前で見せ付けられてしまえば、普通は恐怖でまともな思考ができなくなってしまう。

思考の柔軟性。

木葉の長所であり、短所でもある性質が有利に働いた結果だ。

「す、」「木葉くん」

「……うん。その推理もだけど」

「そやな。普通、八割確信があつても突っ込める勇気がない」

度胸が座っている。

なのはたちは感心の表情だが、それは少し違つ。

木葉は、自分の身の利害など考えていない。

生きていたら成功。

死んだら、それまで。

根本的なところで割り切つている。

「まあつまり、補助に長けた魔術師。虚偽の道化師とでも名付けて

やる

「案外かっこいいのがショックです」

「ついい」とせ、だ。それが見破られた以上、あんたに勝ち田はない

「…………」

「おとなしく、負けといくれねえか?」

そして

## 弱いこと

「負けを認めろ、ですか」

下を向く彼女の表情は見えない。だが、その声からは怒りの感情がひしひしと伝わる。

「甘い、甘すぎですよ」

「……は？」

気が付いたときにはもう、木葉の両腕は体の後ろで縛り上げられていた。

「木葉くん！」

「動かないでください。手元が滑ってしまいますよ。」

木葉の喉元には小型のナイフ。それでも殺傷能力は十分すぎる。

「イリーン、どうやって……」

「どうやって？」

魔力付加を利用した瞬歩。

「ただ、動いただけですが」

それは魔導師としては一般的な技術であり、実際なのはたちには見えていたし、対処もできたはずだ。

だが如何せん、彼女たちからは距離があつた。

そして木葉は弱い。

能力などは関係なく。

実戦に、弱い。

「くつ  
」

だからこれは、ただの木葉の実力、実戦不足。  
相手の切り札さえ見破れば、と思っていた木葉の安直な考えが招いた結果だ。

甘い。

木葉が実戦を戦いぬくには、思考がまだ甘すぎた。

「木葉……」

木葉といリーン。

なのはとフロイトとはやで。

2つの距離は20メートル程。

「それでは、ゲームでも始めましょうか

そつ言つてドレスの中から取り出したのは、木葉の喉元に当てられているものと同じ。

鋭く尖つた。

鉄の、重み。

「的当てです。ただし一方的な、ですが」

右手のナイフは木葉の喉元。

左手のナイフは的に狙いを定める。

「動かないで、ぐださいね」

少しだけ右手を動かす。

たつたそれだけの動作で、木葉の喉元から1筋の血が流れた。

それを視界に捕えたなのはたちは、迷うことなく各自のデバイスを下ろす。

「おー……何やつてんだよ？仕掛けが露呈したーーこつくりー、おまえらなら簡単に倒せるだろ！？俺なんかに構わー」

叫ぶ。

たつたそれだけの行為も、ナイフをさりに深く食い込ませるだけだ。

対してなのはは

「できるわけ、ないよ」

と、絶体絶命の危機を向かえた状況にも関わらず、笑いかける。

「もう、木葉は私たちの仲間なんだよ？」

「まだあんまり役に立てへんけどな、

それでもや

フェイトも、はやくも。

いつもと変わることのない、暖かい笑顔。

そんな表情を前にしては、木葉は何も言つことができなかつた。

ただ、自分の甘さと弱さを恨んだ。

「それでは、あなたから」

言い終わる前に、

「 」

小型のナイフはなのはの右肩に突き刺さつた。  
その箇所を中心にして、どんどん血がバリアジャケットを滲ませる。

倒れそうになりふらつき、寸前で持ち直す　と同時。

今度は左のふくらはぎに鈍痛。

「あ……くつ」

早くも立つことができなくなり、膝をついてイリーンを睨み付ける。

それを見たイリーンはすでに興味をフェイトに移していた。  
瞬時に右足首と右腕が痛みに襲われ、力なく地面に向かう。

はやくも同様に両足の痛みに耐えていた。

「…………間、わずか一分。

「…………ふやけんな」

「…………こんなにも簡単に人を傷つけられる?  
どうして、なのはたちは苦しんでいる?」

「俺の、せいだ」

考える。

考える考える考える考える考える考える考える考える考える  
考える……!!

この状況を打破するには、どうすれば

「…………ストラス」

そうだ。

ふと。

思いついた。

付け入る隙。

奴の　イローンの行動は『ある一点』において矛盾している。

なぜだ?

答えは決まっている。

奴は俺を

「いけるな?」

主人の声でストライトネスは木葉の頭の前まで飛翔し、

「なつ何を」

「貫け」

そのまま、

『yes, my load (お望みのとおりに)』

大量の血が舞つた。

「ぐつ」

鮮血が一面に飛び散る中、ストライトネスに貫かれた者が鈍いうめき声をあげた。

木葉 ではない。

頭を貫かれば即死。

それでもまだ声をだせる者など、いるはずが無い。

貫かれたのは、腕だ。

木葉を守るように覆つた、イリーン(・・・)の右腕。

「 やつ！」

それを確認した木葉は、イリーンの血を浴びながら彼女の腕からストライトネスを無理やり引っ込抜き、そのまま腹部に蹴りをたたき込む。

今度はろくにガードもできず後ろに吹き飛ばされて倒れたの一撃。なのはたちの元へ走った。

「 木葉、くん…… 平氣、だつた？」

「 つ、バカかおまえは！」

無傷の木葉。

致命傷では無いにしろ、出血の激しいのは。

そんな状況でも他人を気遣えるのはに、木葉は何とも言えない動揺を感じた。

「 俺の、せいだろ…… 俺がこんな甘ったれた考えじゃなれば、俺がもつと強ければ！…… せつかく信じて、任せてくれたのに！」

責めてほしかった。

ただ自分を責めてくれれば、何も考えなくていい。  
楽になれる。

こんな時にまで逃げ道を欲しがる自分に、木葉は嫌気がさした。  
最低だ、と思つた。

だが。

「違うよ

この3人がそんなことをできる人間ではない、ということを木葉は知っている。

「これは、私たちが弱かったから。木葉の責任じゃなーよ」

「そんなこと

「私たち、木葉のことを信じたんだよ?」

「……あ。信じてくれた。なのに俺は

すぐに動けるような傷ではない。  
しかし、それでもフロイドは立ち上がり、木葉に寄り添った。

「今もまだ、信じてるんだよ?」

「…」

まだ。

それは、次に繋がる希望。

「なのはも、はやても、私もまだ信じてる

「もううんざり。私はまだ支援できそりゃない

両足に怪我を負った彼女はなおさらだ。

だから、とはやてが続ける。

「頼んだで、木葉くん」

こんな自分でも。

足手まといにしかならないような自分でも、まだ必要としてくれる。

信頼、期待。

ならば、それに精一杯応えたいと思った。  
これまでにないくらい強く、思った。

「……任せて、くれるか？」

「もちろんだよ」

木葉にもたれかかりながら、フロイトは再び地面に膝をついた。  
思つた通り、立っているのも辛いようだ。

「ちょっとだけ待つってくれ」

だから、木葉は1人。

「すぐに終わらせてくる」

腕の痛みに耐えるイリーンに向き直る。

「うん、待つてる」

言つたと同時、3人はアースラの転送システムで回収された。すぐに治療を受けることになるだつ。

「ストラス、気付いてるな？」

『I go to it. (もちろんです)』

しつかりと、ストライトネスを右手で握る。突破口は見つけた。

後は、そこに向かう手段を見つけるだけだ。

「あいつは言葉とは裏腹に、俺のことを殺せない理由がある」

殺す、と散々言われた。

しかし、それについて不可解な点がいくつかあつた。

初めて会つた時も見逃した。

何者かへの報告を理由にして。

そして今回。

殺せる状況はいくつもあつたのに、何故か時間稼ぎのように振る舞つていた。

なのはたちを倒し、木葉だけを連れられるようにな。

2つの事象から察するに、木葉には生かしておく何かしらの『存在

価値』がある。

それはクロノも言つていたことだ。

だからこそ、先程は迷いなくストライトネスを自分に向けた。

イリーンが木葉を庇うことを推測して。

そこで、推測は確定に変わった。

「だったら、それは利用するしかないよな

『mission start (任務開始)』

最初から死なないと分かっていれば、できることは幾らもある。

「神崎木葉、ストライトネス」

期待には、応えてみせよ。

「行くぞーー！」

## 希望の色

木葉とイリーン。

2人きりの戦闘が始まつてから、すでに10分。

「私があなたを殺せないと分かつたから何でしようか? いつやつて体力を削り取り、気絶させてしまえばお終いですよ」

木葉は常に防戦に回つていた。

イリーンが放つ射撃を、ただひたすら受け続ける。

「ぐつ

もう十数発は体に命中しているだろうか。

1つの重さが軽いにしても、流石に辛くなつてきた。

『are you ready? (まだですか?)』

「……後少しだ」

それでも、避けようとはしない。

その場から動かず、からうじて反応できる攻撃に障壁を展開するだけ。

そんな木葉を、イリーンは不愉快に思った。

「どうして避けない　いや、そこから動かないのです? 馬鹿にされている気分ですよ」

そして、イリーンが作り出した光は数十。  
今までで最大の数だ。

「あなたは私の魔力量が少ないと言いましたね。それは間違いです」

「……」

「私は生まれつき魔力を練りこむのが苦手でしてね、一つ一つの威力は並に劣りますが……」

「……」

「魔力量だけなら誰にも負けません。質より量、というやつです」

木葉は終始黙つて聞いていた。

否。

聞いてすらいない。

奥底深く、眠つているかのように思考を進めていた。

「そりそり、終わらせましょう」

数十の射撃が木葉に向かう。

同時にではなく、時間差を着けて四方八方から。

「……よし

いくつもの射撃を見据え、ようやく木葉が動いた。  
深呼吸、そして足踏みを一回。

ストライトネスを右肩に添えて構えをとる。

「だいたい、『把握した』」

そして一步。

前に踏み出したと同時に、一つ目のショーターを切り落とす。

生じた爆煙に乘じてもう一步。

「右

避ける。

今まで受け続けてきた状況と一変。  
すべての射撃を避けながらまた一步。

「上。右斜め後ろ。正面」

踏み出す速度は一步ずつ上昇していく。  
直前よりも速く。もう一步分速く。  
気が付けば、走りだしていた。

「なつー!?.」

イリーンは硬直する。

全て避けられたから、ではない。

全ての攻撃が、事前に読まれていたからだ。

「ストラスー!」

そこには、隙ができた。

ただ振り下ろす、お世辞にも芸のある攻撃ではない。

しかし、手を伸ばせば届く距離にまで接近してくる」の状況下では、最も有効な一手だった。

「やつ……」

風を斬る感触。

ただ強く、精一杯の力で。

それは見事に、イリーンの負傷した肩へ衝突した。

「うぐあ

」

低いつめき声をあげ、イリーンは動きを止める。  
完全に意識が傷口へ向かっている。

すかさず木葉は拘束 バインドを施した。

「……なんとか、成功だな」

理解に時間がかかってしまった、と嘆息。

なのはたちが名付けた木葉の能力。

相手の攻撃パターンを読み取り、そこに自らの憶測を織り交ぜ、次の動きを予測する思考能力。

簡易に説明してしまえば、頭の回転の早さだ。

木葉は、それがズバ抜けている。

今回あえて受け手に回ったのも、正確で確実な一撃を叩き込むための布石。

パターンを読み切ることにのみ意識を集中していたからだ。

しかし。

「はつ 」

イリーンは嘲るよつに笑つていた。

「あなたごときのバインドなら、すぐに抜け出せます」

そう。

木葉にはまだ決定打がない。

イリーンを降伏させられるだけの一撃が。

「あなたに私は倒せない」

「俺には、な」

木葉は空を見上げていた。

それに留つて、イリーンは顔を上げてみる。

「 ！」

そこには、光があった。

桃色。  
金色。  
白色。

よく見慣れた、彼女たちの色だ。

「流石にあいつらの砲撃を受けりや、あんたもただじや済まないだろ」

「あ……」

「あいつらが撃つのと、あんたがバインドから抜け出すの。  
どっちが早いか賭けてみるか？」

脱力。

なのはたちが戻ってくるのは、明らかに計算外。

すでに、戦いを続ける気力は無くなってしまった。  
絶望の表情がそれを物語っている。

「私の、負け……」

そして。

再びのアースラ艦内。

いつもある部屋の一つ、医務室の扉が開かれた。

「あ……木葉くん」

「おひへ、待たせたか？」

何気ない挨拶と共に入室した木葉だが、いくつかの傷から戦闘の形跡が確認できる。

静かな医務室。

3つあるベッドは、全て少女たちによつて埋まっていた。

「うそ。ちよつと待つたかも」

意地の悪わいな笑みでフヒイト。

軽い冗談を言えるあたり、そつ酷い怪我ではないよつだ。

「そりゃ悪かった。具合はどうだ？」

それでも、一応礼儀として尋ねておく。

何と言われても、自分のせいだとつ罪悪感は消えない。

「少し痛むけど、もう歩けるよ」

「そつか」

だが、謝りはしない。

心やそし、少女たちの気遣いを卑下してしまつほど、木葉も無神経

ではない。

「まあ、あれやな

その意を感じたのか、はやてが明るい声で呟きやいた。

「初場所、初勝利おめでと!」

「初場所つて、相撲のノリでいいのかよ」

病室とは思えないほど、とても穏やかな空間だ。  
さつきまで戦つてたんだよな、と木葉は自分の中で再確認。

うん。

戦つてたな。

痛いし。

「勝利……つて言つていいいのかな? ちょっと、ズルしちまった」

「ズル?」

少女、イリーンはあの後アースラの局員によつて捕らえられた。  
抵抗の様子もなく、拍子抜けするくらいすんなりと。

「ああ。おまえらの力を借りちゃったからな」

「……? 私たち、何もしてないよ?」

「いや、こつちの話だ。気にするな」

なのはと同様、フロイトとはやても首を傾げる。

しかし、問い合わせたところで木葉は何も話さないだらうことは分かつていた。

彼ほど分かりやすい性格の持ち主はないだらう。

「ねえ、木葉」

「ん？」

「ありがとね」

「……ああ」

何の『ありがと』だらう、と木葉は思つた。

イリーンに勝つたことか。  
無事に戻ってきたことか。  
信頼に応えたことか。

それでもいいや、と思考を停止。

何にせよ、礼を言われるのは悪い気分ではない。

「それで、あの女の子は?..」

体を起こしながらのはが尋ねる。  
もう歩ける、というのは本当にらしい。

「今はクロノが尋問中だ」

「……尋問」

「つひても、軽いお茶会のノリだよ」

お茶会、といつ言葉に3人がピクッと反応を見せる。尋問と聞いたときよりも法えていた気がするのは氣のせいか。

なのはが『リンティ茶……』と言つたのが耳に入ったが、とりあえず流しておいた。

触らぬ神にたたりなし、である。

「氣になるなら見に行くか。もつ歩けるんだろ?」

「え……でも、いいのかな?」

確かに、氣になるところではあった。

散々殺すなどと言われ、異様な名前まで付けてきた少女に興味がないはずがない。

「言つたら、お茶会のノリだつて」

もつとも、イリーンは終始不服そうな表情をしていたが。

「……うん。お話、してみたいな

「決定だな。ちよつと待つてろ、はやて。車椅子取つてくる

はやての怪我は両足。

流石に歩くのは辛いだろう。

はやての謝礼を背中で受け、木葉は席をたつた。

「車椅子、か。久しぶりやな」

「そうだね」

くすり、と笑いながらフェイト。

言つては悪いが、はやてには車椅子が似合つ。長年乗り続けていたからだろうか。

皮肉なものだ。

「それにして、だよ」

「……なのは？」

語り掛けるようではなく、1人つぶやくように喋りだすなのはこ、フェイトは嫌な予感しかしない。

「明らかに実力差があるあの子に勝つたつてことは、やっぱり木葉くんは策士向き……となると、今後の練習メニューは

「あはは……完璧にスイッチ入つてもうたな」

はやては教導官モードに入つてしまつた友人を見て苦笑い。

「木葉、御愁傷様……」

そしてフェイトは、新しい仲間の行く末を案じるのだった。

## 話の条件

「話さない？」

「ああ。少しも口を開かないんだ」

リンディとクロノは疲弊の表情。

人形に話しかけるようなことを続けていたようで、当然といえれば当然だ。

「戦っている最中は、饒舌だったんだがな」

打つ手なし、といった感じでクロノは肩を落とす。  
対してイリーンは無表情のまま、正座の体勢から動こうともしない。

「イリーンちゃん、お話を聞かせてもらえないかな？」

なのはが話しかけるも、結果は同じ。

まるで機械のようにまばたきを繰り返すだけだ。

しかし。

「……幾らだ？」

ピクリ、と。

ほんの僅かだが木葉の言葉に体が反応した。

「やつぱりか

「」、木葉、どうこう」と。」

焦りながらフロイト。

木葉はいつも通りの面倒くわかつた表情で応じる。

「」このつの態度を見りやだいたい分かる。『話せない』んじゃなくて、『話せない』んだ。つまり、依頼者が存在する。そいつとの関係が忠誠心なのか金銭契約なのかは分からなかつたが……まあ、その反応は後者だらうな」

なり話は早い、トイリーンの眼前へ。

「500円」

「……」

「800円」

「……」

「1000円」

「何からお話ししましょうか?」

「案外安いな、おまえ」

基準は紙幣みたいだ、とクロノに通達。即席の分析力と簡素だが効果的な交渉術を展開する木葉に、その場の全員が舌を巻いた。

瞬時思考。

木葉の能力を再認識。

「まずはイリーン、あなたのことだ」

「血口紹介でよろしくですか？」

「よろしくね」

「本名は明かせませんが、性別は女。年齢は11歳。『ある方』の依頼を受け、あなた方を殺しにきました」

Aさんだけは別ですが、と付け加えて。

「【管理局の管理者】ってのは？」

「存在しません。『ある方』にやつね乗れと言われました」

「その『ある方』ってのは誰だ？」

「言えません」

「なんで俺だけは特別なんだ？」

「なのはたちを殺す理由は？」

「なのはたちを殺す理由は？」

「……」

「聞かされてない、か」

そこで一旦質問を切り上げ、リンディーとクロノに耳打ちをする。イリーンはなのはたちに任せていた。

「何か分かったのかしら？」

リンディーとクロノは共に、木葉の思考能力を信頼するようになつていた。

だから先程の会話で、木葉が何かを掴んだのだなうと思つたのだ。

「ああ。うまく【交渉】できれば、イリーンをじつに引き込めるぞ」

「弓を込めるって、裏切らせるところ」とか？

「その通りだ」

確信を持つた態度。

木葉はすでに決まつたことのように話す。

「話を聞く限り、イリーンと『ある方』ってのに金銭関係以外の繫がりはない。金で雇われた臨時傭兵って感じだな。

なら、ただ単にそれ以上の金をこいつが出してやりやいい

「弓がつて……管理局が、か？」

「当たり前だろ」

「君が思つてゐるほど、管理局の金は使い勝手がよくない……そんな簡単に無理、「無理、とは言わせない」

クロノの制止をせりに制止。

「H-1級魔導師3名の負傷、及び一般人2名の殺害。そんなやつから依頼主の因果関係も引き出せないまま、何も分かりませんでした。と上に報告するのか?」

「…………」

そこで、理解してしまった。

木葉の言つ【交渉】が、イリーンとの間にないことを。

「金さえ用意できれば、イリーンから何でも聞き出せます。それは俺が保証してやる」

これは、木葉と管理局側の交渉。

引いては、クロノとリンクティとの交渉だ。

「……上と掛け合つてみましょつ

「艦長……」

しかし。

そこに選択の余地はない。

「どう考へてみても、木葉さんの提案に分があるわ」

「いい判断だ、リンクティさん」

木葉にとつて、管理局の評価など正直どうでもいい。  
なぜ自分たちを狙うのかにも興味がない。

ただ。

知らないと気が済まないことが一つだけあった。

神崎葉巻。神崎落葉。

両親の死の理由だけは、知つておかなくてはならない。

結果から言つと、引き抜き 裏切りはあっさりと成功した。

まずはいくらで今の依頼主に雇われたのかを聞いただし（これに6000円使わされた）、それ以上の額を提示しただけだ。

しぶしぶ了承するのかと思ひきや、

「あなた方のことが急に大好きになりましたー」

と自分の芸風をぶつ壊して全員に抱きつき、見事にこちらの味方に

なつたのだった。

なんとも、お金の力は恐ろしい。

それにして、と木葉は思つ。  
もともと容姿がいいだけに、やつやつと懐かれると単純に可憐りし  
い女の子だ。

補助魔法が優れているだけあってイリーンの腕の怪我はすでに完治  
に近いが、それでも罪悪感は残る。

可憐らしい女の子を刺した。

ひどこトライウマになつやつな一言だ。

「えつと……イリーン」

とつあえず、謝ひつ。

うん。

それが一番だ。

「何でしょ、木葉わん？」

味方になるにあたり、イリーンはみんなを名前で呼ぶようになった。  
ちなみに提案者はなのは。

お金のためなら何でもしますーとこヽイリーンの返答にせきつけたい  
ことが山ほどのだが、気にしない。

「その、腕の」となんだけばれ」

「ああ、これですか」

もつ何ともありません、とふんふん振つてみせる。

「それでも、一応謝つとつと思つてな」

「謝る、ですか？」

一瞬の思案の顔。

刹那、ぱつと明るい笑顔になつた。

「感謝料ですね！？」

「…………」

やつぱり却下。

謝るのなし。

つべづべ、お金は恐ろしこと思つた。

と、まあそんなことがあり、なんにせよ強力な仲間ができたのだった。

ただし、イリーンから情報が得られるのは短くとも3日後。リンディが管理局上層部に掛け合つた結果、それが金の届く最短期

間らしい。

正式にお金を受け取るまでは話せません、といつのがイリーンの主張。なんともじっかりしたお子様だ。

ちなみに、その金額は天文学的。全世界の管理局というだけあって、その膨大なスケールは計り知れない。

といつ訳で。

最低3日間の休暇が与えられた。家でゆっくりだらだらじょう、と意気込んでいた木葉だったが

「木葉くーん、そつちの注文お願ーい！」

「あのせ、休憩って知ってるかー?」

喫茶翠屋。

なのはの両親が経営するこの店にて、何故か従業員服を着た木葉がいた。

「 つたく。わつわと注文しろよ」

ゴジン、と。

ぶつかりぱつに尋ねる木葉の頭を、なのはがひっぱたいて店の奥に

連れていぐ。

「うひえよー急に殴るやつがあるか！？」

「だつて全然接客になつてないんだもん！」

「その前になんで俺が接客やつてんだよ！？」

それはリンディの提案だった。

思考能力は目に見張るものがあるにせよ、性格にやや難がある木葉。せつかくの三日間を利用しない手はない、ということで作戦の決行が決定。

### 【木葉更正大作戦（仮）】

「一日」と二人ずつが木葉を更正させていく、下手をしたら訓練よりも厳しいプログラム。

初日はなのは担当といつて、木葉は翠屋で接客のアルバイトに勤しむのだった。

「とにかく、基本は笑顔だからねっ！」

「……面倒くさ」

「だから、ね？」

「……はー」

こんなことで木葉の性格が正常になるとは思えないが、【木葉更正大作戦（仮）】とは記されているとおり仮の姿。

実際には、心に負った傷を表に出さない木葉の慰安計画である。なのははその真の計画を忘れているのか知つていてか、どちらにせよ更正に尽力を尽くすのだった。

つかの間の休息。

よつやく訪れた安穩。

短い様で長い木葉たちの休暇は、まだまだ終わりそうにない。

## 一人と一人

孤独を求めていた時期があつた。  
孤独を得ていた時期があつた。  
ひたすら孤独に身を委ね続けて。  
今度は、繋がりが恋しくなつた。

「い、いらっしゃいませー」

笑顔。笑顔。  
接客スマイル！

木葉の頭を支配するのは、そんな言葉だけ。

「（）注文などー、お頼みになつたらいかがでござりますかー？」

口調はつたない、というよりもはや日本語ではない。  
よつてなのはの鬼の監視を逃れるには、とにかく笑顔しかないのだ。

「木葉くん、お昼の時間だよー」

そんな更正プログラムを耐えぬくこと約6時間。

朝9時から始めていた作業に、昼休みという名の休息が訪れた。

昼にしてはずいぶんと遅い時間だが、正午付近は喫茶店にとつてか  
き入れ時なのだが、仕方がない。

「どうあえずお疲れ様ー。どうだった？」

「なのは、おまえはいつもこんな事やつてんのか？」

脱力感。

それが言葉と態度の節々から感じられた。

「うーん。まあお手伝いするときはだいたいね」

「……尊敬するよ」

「「いやほほ、ありがと」」

素直に褒められて顔を赤らめるなのは。

サンドイッチとお茶。

そんな簡素な昼飯も2人で食べると美味しいな、と思つた。

「それから、悪かつたな」

「……なにが?」

「氣い、つかわせちまつてよ」

「なんだ。気付いてたんだ」

【木葉更正大作戦（仮）】

簡単に言えば、木葉に元氣になつてもうおひとこう計畫。

その効果がどうか。

木葉は普段めったに見せない笑みを浮かべていた。

「うへこりのは、素直に嬉しいもんだな」

「やう? 私は『面倒くさい』んだらうなあつて思つてたけど

わざかに舌を出して、意地悪うになのは。

そんな態度に、木葉はさらに笑う。

「確かに、面倒くさいな」

「えー、なにそれ」

不服そりに口を尖らせんなのはこ、でもな、と木葉。

「ちょっと分かったことがある」

「うん?」

「面倒くさいイコール、嫌な事つてわけじゃないんだな、つて」

わいと。

自分の人生は面白いものではなかつたのだらう。

自分自身を客観的に見て、始めてそう思つた。

面倒くさい事とは、決してつまらない事ではない。  
こうやって口キ使われるだけでも、その中に楽しさが、嬉しさが隠  
れていた。

不思議と、嫌な感じはまつたくしない。

「やつ言つても「うるさい」と、嬉しくない」

なのはがいてくれるからだらうか、と思つた。

それはなのはが特別とこつ訳ではなくて。  
一緒に喜んで、一緒に楽しんでくれる誰か。

それだけで笑えるのなら、面倒くさい事も案外悪くない、と。

「木葉くんつてな」

不意に、名前を呼ばれた。  
いつになく真剣な表情で。

「フハイアケちゃんの」と、好きだつたりするへ。

「……何でやつ思つ?」

「あの時から、雰囲氣で。なんとなくだけどね」

あの時。

それは少し前の話。

2人で共に泣いた、あの「」とを指しているのだひつ。

「じつだひつな」

「私、結構真剣だよ?」

「……いや、別に茶化して言つてるんじゃないわ」

分からなかつた。

確かに、フロイトの「」とは気に掛けている。

しかし、それが

「好き、に繋がるのか分からぬ」

自分に似た境遇に親近感を持つたのか。

同情を抱いたのか。

純粋に、好意なのか。

つまり、そういうこと。

自分で中で整理がついていない。

「だけど」

「これだけは言える。

「あいつみたいな奴は、嫌いじゃない

嫌いじゃない。

その逆は、好きなのか。  
どちらでもないのか。

「そんなの、ゆつくり決めればいいだろ?」

「……そうだね」

納得、といった感じで立ち上がる。

彼らには時間がまだたっぷりと残されている。  
明日も、明後日も繋がっていく。

人はそれを、希望と呼んだ。

「まだまだお客様さんは来るからね。がんばろっ」

「はいはい」

それでも。

面倒くさいことに変わりはないな。

と、いつもと同じように木葉はため息をついた。

いつもと違ったのは、一つの想い。

明日を楽しみだと思えた、大事な想い。

翠屋での疲労を足腰に溜めながら、木葉はハ神家に到着した。

「料理を教えたる！」

といつのが、昨日電話での開口一番。  
何でも、（自称）料理の鉄人であり、（自称）天才シェフも真っ青  
だそうだ。

たぶん。

それは両親を失った木葉に対する隠れた気遣いなのだろう。  
だが、それがまったく隠れていないことにはやはては気付いていない。  
暖かさが、滲み出てしまっている。

「んー、足腰が痛い」

昨日より疲れなれば何でもいい、と思つた。  
翠屋の忙しさは異常だ。

その上、いつの間にか突如現れたイリーンに奢らされるといつ始末。  
とことん面倒くさい。

「つてことで、さつやと始めよ!せ」

「何で気付いたら座つてんねん!…?」

許可を得てから上がらんかい、とはやで。  
いきなり現れた木葉に余程驚かされたのか、胸に手を当てて呼吸を  
整える。

「ユウちは疲労満タンで来てんだよ。もつといたわれ

「人の家で態度でかすぎや……」

ラフな格好にエプロン。

普段とは違つた自然な服装は、一段とはやてを魅力的に見せている。下準備はすでに出来上がつていろ、文句を言いながらも木葉を立たせて台所へ連れ出した。

「へえ、結構本格的な感じで」

「当たり前や。万年一人暮らしを舐めたらあかんやー」

「……だな。悪い」

「謝ることやないて。それに、木葉くんも一人暮らしのお仲間入りや」

「ああ。 ははっ、そつだつた」

決して、笑いながらするような話ではないのだらう。

だが。

はやてとならそれができる。

どんなことでも明るい笑顔で、吹き飛ばしてくれる。

そんな所も、彼女の魅力の1つなのかもしれない。

「せやけど、今はちやんと家族がいるんよ？」

「ん。ヴォルケンリッター、だつたか？」

はやてに手を添えてもらつて切るのは人参。

「そや。今は長期任務でみんな出でるんやけどな」

「管理局も、人使いが荒いよな」

茶色の固形物があるところから、メニューはカレーで間違いないだ  
るわ。

いくつでも作り置きができる、一人暮らしには嬉しいメニュー。

「まあ、私らは罪滅ぼしも兼ねてるところがあるからなー」

「……万引きとかしあやつた？」

「あつはつはー、ビツコたるか?」

目がマジだ。

笑ってるけど目がマジだ！

危機を感じた木葉は黙々とじやがいもに向かつ。

その手つきを訂正するよつに、再びはやての手が木葉に伸びた。

「聞きたいんやろ?」

「おまえが言いたいんだろ?」

「んー、まあそやね。木葉くんには聞いといてほしいかな

闇の書事件。

管理局のデータベースにはそう記されてる、はやてと4人の騎士、そして現在の親友との出会いのお話。

ほとんどはやてが話していて、木葉は相づちを打つ程度。それでも話の節々には興味津々に食い付いてくる。

「なのははとフロイト、そんな頃からぶつ飛んでたんだな……」

「そやねー。イリーンちゃんほどでもないけどな

「あいつを引き合にに出したら誰でも一般人だ」

殺戮金好き幼女イリーン。

ものすごい濃ゆいアニメが作れそうだ。

「まあ色々あつたけど、今は幸せですって話や

はやてには悪いが、木葉は少し安心した。

誰でも辛くて、痛い過去を持つていて。

それを乗り越えて幸せな人間が周りに存在してること。

なのは然り。

フェイト然り。

はやて然り。

クロノ然り。

イリーンも、 そうなのだろうか。

今度じつくり聞いてみよう、 と思つた。

後は鍋で煮詰めるだけ。

2人のカレーは、 もうすぐ出来上がる。

すでに日は暮れ、 涼しく心地よい風が舞つゝる。

2人は食卓に座り、 過去話を一旦打ち切る。

「それでは、 木葉くんの料理人デビューを祝つてー」

「ほんと手伝つてもらつたけどな。 乾杯」

キンツと鳴らされたグラスの中身は牛乳。  
少しばかり雰囲気に欠けるが未成年では何も言えまい。

「いやいや、 初めてにしてはよーやつたと思つで?」

「なら、よかつた

周りが優しい人間ばかりなのは、何故だろ？  
自分は逃げてきただけの弱虫なのに。

たぶん、補い合っているのだろ？

埋め合わせるよ。

凸と凹。+と-。

弱いから、強い意志たちが集まる。

そんなことを考えながら、まずは一口。

「……うまい。

何だこれ、すっげえうまい！作り方は普通だったのにうまい！？

とりあえず、うまいを3連呼。

語彙の豊しさは勉強量に比例している。

「そら、私の愛が存分に含まれてるからな」

「……冗談？」

「うん。冗談」

「ちくしょう散れこの野郎」

「野郎やないもーん」

そこまで絶賛されても、はやても照れてしまつ。  
軽い冗談は、その照れ隠し。

「木葉くん、期待してもた？」

「…………」

「もー、浮氣したらあかんよ？」

「浮氣つて、誰にだよ？」

「フハイテナリ決まつてゐやん」

またその話か、と木葉は嘆息。  
そんなに分かりやすいのだつた。

「昨日なのはにも言われたんだけだな…………」

と、そこからには昨日と回じ話。  
この調子でこくとクロッセコントイ、イリーンにも知りなれてくる可  
能性もある。

そうなると非常にまづい。

「あんな」

そして。

木葉が話を終えたとや、せやてから返つてきただ葉はなのはのやれ  
とは違つてこた。

「あほか」

「なつ　何だよいきなり」

心底呆れた、といった表情。

それは木葉にか、木葉の言葉で納得してしまったなのはにか。

「つまりあれやる。自分の気持ちを知るのが怖い、と。少女マンガの乙女かあほ」

「またつ　2回も聞こやがつたな！？」

「何回でも言つたるわ。木葉くんのあほ。……フロイトちゃんの気持ちもひやんと考えたらな」

「あん？フロイトのつて……」

「フロイトひやん、ものすげー奥手なんよ？」

「いや、知つてゐる」

フロイトの奥手な性格は、現代では希少価値なほどで。

あまり馴れない相手には自分の意見を提案する「」とも躊躇つ。

木葉には、少しづつ心を開いてくれたのだが。

「そんなんで、いつまで氣持ちが分からへんつて言つ続けるんや？  
木葉くんから歩み寄らな、逃げてるだけやと何も変わらへんよ？」

「俺から、か」

また逃げるのか。  
はやては木葉とフュイトを思つての発言だらつが、木葉にはそう聞  
こえてしまう。

今までの生き方。

俺はそれを否定すべきなのだろうか、と。

「正直、怖いのかもな」

「自分の気持ちを知るのが?それとも、フュイトちゃんの答えがか  
?」

「どうちも、だよ」

木葉が自分から本音を語ることをめったにない。

だからこのまま、木葉にとつてそれほど大事なこと。

「まあ、フュイトちゃんもやけど。木葉くんも超がつく鈍感やから  
なー」

「そんな自覚はなかつた」

よほど美味しかったのか。

2人のカレーは話の最中でも減り続け、いつの間にか木葉と同時に手  
を合わせる。

「言いたいことは色々あるけど、とりあえずありがとな、はやて」

「ええよ。今日は早く帰つて明日に備えてな」

「……まあ、それについても色々考えてみる」

「うん」

玄関先。

木葉は余ったカレーを半分もらい、帰路につく。

そして、残された者。

「木葉くんと、フロイトちゃんか」

1人になつたはやは一言。

「お似合いやと思つんやけどなー」

そんなつぶやきは夜風に乗つて。  
すっかり冷えた闇空に消えた。

人生、山があれば谷がある。

どこかで登ればどこかで降りる。

どこかで降りればどこかで登る。

そういうふうに、なつていてる。

だから。

幸運と不運は、人生で総計するとプラスマイナスゼロになるらしい。

だとしたら。

そろそろ私にも、幸運が訪れてもいいのではないか。

真っ白で、雪のような花びらが絶え間なく舞い続ける世界。

第3管理世界。

アレイトリーシャ。

とても穏やかで、人も少ない世界。

その中でも極地　　まったく人影のない広場に、少女が佇んでいた。

「ただいま、帰りました」

白いドレスが映える少女。

イリーンは、静かに地面に膝をついた。

「パパ、ママ」

イリーンの前には2つの墓石。

しかしそれは墓石と呼べるような立派なものではなく、単に石を積み重ねて作られたものだった。

それに名前が彫られているのだろうが、拙い文字で書かれたそれを読み取ることはできない。

「帰つてきて、しまいました……」

故郷に辛い思い出しか持つていらないイリーンは、今さら帰つて来ることを後悔した。

それは、5年前の記憶。

アレイトリーシャ。

この世界に、ある一つの村があった。

「いつも迷ひにねー、  
ちやん

「えへへ、困ったときさつでも言つてねー」

彼女がまだ6歳の頃。

今となつては忘れてしまった、本当の名前を持っていた頃。

魔力量が大きく補助魔法に長けていたイリーンは、その集落の小さ

なお手伝いをせんとして可愛がられていた。

「 ちやん、この荷物を運ぶのを手伝ってくれるかい？」

「 うさつ、今いくねー」

村の人々はあらゆる場面でイリーンを必要として、彼女自身も無償のお手伝いを楽しんで行っていた。人の助けになること。

幼いながらに、それは彼女にとって大きな生きがいとなっていた。

「 パパ、ママ。ちょっとお出かけしてくるー」

「 今日もお手伝い？」

「 うさんー。」

「 セッカ。気をつけてね」

「 うさんー。」

そんなイリーンと両親。

3人はいつも普通の、しかし幸せな家庭を築いていた。

いたの、だが。

「 ねえ！ 最近 ちやんのお手伝い料が高すぎるんじゃない？ 今田は」れ以上値段を上げないよつ、お願いしこきたの

ある日急に家に押し掛けてきた村の人々によつて、イリーンに衝撃の事実が露呈した。

今まで無償のお手伝いとして自分がやつてきたこと。  
村のみんなの笑顔が報酬だと。

そう信じたことを、いとも簡単に覆されたのだ。

「何言つてんだ。うちの物をそんな安い金で使ってもらつちや困るんだよ。払えない奴に、コレは一切使わせない！」

物。  
コレ。

自分の子では、ないのか。

優しい家族。

そんなものはなかつた。

すべてただの幻想で、虚偽だつた。

その日から、両親の彼女に対する扱いは豹変した。

本性が露呈してしまつた今、『自分の物』である彼女に気遣う必要が見出せなかつたのだろう。

自分を物として扱われ始めたイリーンの心境は、とても表現できるものではない。

自分の部屋に閉じこもる日が極端に増えた。

悪い夢なんだ、と何度も自分に言い聞かせた。

そんなことがあつて以降。

見せかけだけで繋がつていた家族は、ひどくあつさつと崩壊に向か

つた。

細い糸がぱつり、と切れるように。

心を閉ざしたイリーン。

使えなくなつた所有物に苛立つ両親。

そんな関係がいつまでも続くはずはない。

いきなり入つてこなくなつた金への欲望が、両親の間にも亀裂を入れた。

前触れもなく始まつたのは、夫婦喧嘩などではない。  
もはや、殺し合いだつた。

私のせいだ、とイリーンは思った。  
思つたから、父と母を止めに入つた。

……はずだつたのに。

残されたのは、2人の血に打たれたイリーンただ1人。

どうして、魔法を使つてしまつたのだろうか。  
どうして、力加減を間違えてしまつたのだろうか。

どうして、……

「親殺しの私に、墓を参る資格なんてないのでしょうが

辛い過去を想起しながら、イリーンは一輪の花を添える。

綺麗な、蒼色の花弁。

母から受け継いだ、瞳の色。

「パパとママに、お伝えに来ました」

両親を失つてから今までのこと。  
それから、これからのこと。

「不思議な方たちに出会いました。お金よりも大切なことを、教えてくれるそうです」

イリーンを初めて墜としてくれた人たち。  
繋がりが大切なだと教えてくれた人たち。

「私は、それに興味があります」

ずっと昔に忘れてしまった、大切な気持ちに。

言いながら、笑つた。

それは家族に向ける、優しい笑顔。

「パパとママが見つけられなかつた何か。それを探しに行つてきま  
す。

木葉さんたちと、一緒に

立ち上がる。

その日に、迷いはない。

「それを見つけられたなら、また会いに来ますね。今度はたくさん  
の花束を持つて」

それでは、と言い残し歩を進める。

無理を言つて外出させてもらつたのだから、早く戻らなければ。

その時。

一陣の風が白い花を一斉に揺らした。

イリーンの耳は、それを確かに捕えた。  
がんばつて、と囁かれた微かな声を。

ただの幻聴だったのかもしけない。

しかし、そんなことはどうでもいい。

はい。  
と風に返事をする。

彼女の瞳からは暖かい光がこぼれた。

## 2人の距離

一步だけでいい。

その一步を踏み出せる勇気が欲しくて。

そうすれば、手の中に収まる気がしたから。

海鳴市から少し離れた市街地。

そこには少しばかり名の知れた待ち合わせのスポットがあり、その前に立つのは金髪の少女。

そして、少女の横で両手を合わせる木葉の姿があつた。

「本つ当たり悪い！」

木葉を待つこと1時間。

寝坊というなんの個性もない遅刻の仕方をやつてみせた木葉に、彼女は怒るでもなく微笑を返した。

「木葉、ちょっと変わった？」

「……へ？」

予想もしていなかつたフヨイトの反応に、木葉は呆然と顔を上げる。

「初めて会つた頃の木葉なら、『遅れた、起きの面倒くさかつた』とか言つてたよ。きっと

「……そんな嫌味な奴だったか、俺？」

「どうだよ、と今度は苦笑。

「でも、変わつてないといろもあるね」

「……例えば？」

「遅刻していくのは、予想してた」

とりあえず今までの生き方を反省した。  
もう寝坊はしない、と心に堅く誓つて。

「お詫びに丼飯は奢らせてもらひますよ」

「うん。 ありがと」

そして。

そういうフロイトも変わつた、と木葉は思った。

出会つた頃はここまで心を開いてくれなかつた。

今だつて、遠慮せずに『うん』とは言つてくれなかつただろう。

休暇3日目。

この日フロイトは木葉をお茶に誘つた。

ゆつくりと休日を過ごしたい木葉には素晴らしい提案であり、喜ん

でいたのだが。

単純に、寝付けなかつた。

なのはやはやてに核心をついた話をされた結果、柄にもなく緊張してしまつたのだ。

そんな状態が一晩で消えるはずもなく、どこかぎりちない動きでフェイトと並ぶ。

「で、これからどうするんだ?」

「ソレからちよつと行つた所にね、静かな雰囲気の喫茶店があるんだ」

カジュアルな黄色のワンピースに調和した金髪をなびかせながら、木葉の手を引く。

「 」

別にやましいことを考えていた訳ではない。

が、妙に意識してしまつてゐる女性に手を握られた木葉は、その熱を帯びた手を振りほどいてしまつた。

「あ……」

フェイトは木葉の赤くなつた顔を見て、自分のとつた行動の意味を理解。

「う、うめんつ」

それが今さら恥ずかしい」とだと思い直したのか、フュイトも顔を真っ赤にして下を向く。

「い、いや……その

フュイトちやん、ものすごく奥手なんよ？

なぜかこの時、急にはやての言葉を思い出した。

木葉くんから歩み寄らな、逃げてるだけやと何も変わらへんよ。

他人になかなか行動を起こせないフュイト。

そんな彼女がここまで心を開いてくれていてるのに。

また俺は、逃げようとしたのか？

そつ思つた時にはずでに、体が動いていた。

「あ……」

所在なわざに行き場のなくしたフュイトの手を取り、何事も無かつたかのように再び歩きだす。

「い、木葉、あの……手」

「嫌か？」

「え……う、ううう。そんなことない」

「じゃあいいだろ。」つむだよな?」

暖かい、とフロイトは感じた。

わいわいなくて、ぶつかりしきつなご、優しい手。

そんな木葉の手に引かれて、フロイトは心地よやかに手を組めた。

「うそ?」

ぎゅうっと。

強く、もつと強く握り返す。

その分だけ、暖かさが増す気がして。

自然と、2人の口が緩んだ。

「あそこ」の喫茶店で一番高いのって何だつたつけな?」

「……俺の財布には限度があるからな」

「ケチ木葉」

「つむだよな?」

こんな何でもない会話でも心が弾む。

フロイトだからかな、と木葉は思った。

木葉だからかな、とフロイトは思った。

お互いに。

お互いの存在が大きくなりつつある今を感じていた。

静かに音楽が流れる穏やかな喫茶店。

その席の1つに、2人は向き合って座る。

「ねえ、木葉」

軽い昼食としてスープを取りながら、フェイトは向かいに呼び掛けた。

「私たちの間では、お互に遠慮はしないって言つたよね？」

「ああ、言つたな。確かに」

2人の約束。

あの時、あの場所で誓つたこと。

「じゃあ聞くけどね。最近、無理してない？」

「無理、って……何のだよ？」

「あの子、イリーンのことだよ」

フュイトが話をしたかったのは、つまつたつこつわい。

復讐に興味が無いとは言つても、田の前に両親の仇がいるのだから。普通なら氣が氣でないはずだ、と。

お互に遠慮しないと制約したからこそ、前触れもなく核心を尋ねられる。

そんな関係も、木葉がフュイトを気に掛ける要因の一つでもあつた。

「憎くないのかってことか?」

「……うん。あんまり、こいつ言い方はよくないんだけど

言い淀んだのは、イリーンのこれからに関わるから。何だかんだといって、フュイトがすでにイリーンを仲間だと認めている証拠だ。

「あの子は木葉の両親を殺したんだよ?」

果たしてフュイトはそれを直観しているだろ? か。

「それなのに木葉は無頓着っていうか……何を考えてるのか、全然分からない」

それが怖いんだ、とフュイトは言つた。

抑えつけていたイリーンに対する憤りが、いつか溢れだしてしまつのではないかと。

そんなフュイトに、木葉は困ったように語る。

「何で言つかな……あこつは、仇じゅねえよ」

「仇じゅ、ない？」

「金で動かされてただけだら？」

「でも……それでも、だよ

割り切つている。

それは木葉が有す特殊な思考回路であるがゆえに、普通に考へると筋道が通らないことがある。

殺したのはイーリーンだ。

というのが、一般的な帰結だら。

それが非合理的であつたとしても。

「まあ、確かにそつなんだけどな 例えば、だ。子供にお使いを任せせる親がいたとして、子供にお駄賃を渡すだら？で、その子は言われたとおりに買い物をしてくる」

「……うん」

「子供はお駄賃つていう利益はあるナビ、『買い物』として損得をするのは親だけだよな？」

つてことは、そこでの目的達成はすべて親の側に果たされるつて事

つまり仇はイーリーンではなく、依頼主であると。

「仇なんて小難しい」とは、そいつに会つてから考へるよ

当たり前、といった感じで堂々と語る木葉。

フェイトはそれを見て、重く考えすぎていた自分が馬鹿らしくなつた。

ああ、いつもの木葉だ。

独自の思考で物語を作つていく、いつも通りの木葉だ、と。

頬が緩む。

どうして木葉の言葉には説得力があつて、安心感があるのだか。

言つてこなによは、かなり滅茶苦茶なの。

「やつらの根本的な所は、やつぱり変わつてないね」

「満足したか？」

「うん。充分だよ」

屁理屈で臍曲りで。

そんな木葉も、好きなんだ。

好き と。

フェイトは「」で自分の気持ちを認識した。

「あのね、木葉」

「うん？」

私は、木葉が好きなんだ。

一緒にいると落ち着くのも。  
安心できるのも。

もつとたぐわんお話をしたこと無いのも。

好き、だから。

「あつと、仲良しひようね？」  
だけじ。

今は、このままでいい。

「のままの関係で、」のままの距離感で。

徐々に歩んでいけば、こつかいつと

そして木葉も。

思つことはフュイトと回じ。

フュイトが好きだ、と。

だから。

「やうやく

躊躇うことなく。

力強く、うなずいた。

その夜。

クロノから連絡が入った。

管理局本局からの届け物。

紙幣の重み。

スーツケース数百個。

## イリーンの休日

「暇ができてしましましたね」

「ここは海鳴市。

風が穏やかに流れる晴天の中。  
私、イリーンはお散歩中です。

「いいお天気ですねー」

こんな日は、思わず幸運が舞い込んできたりするものです。

主に、お金とか。

それにしても。

のんびりと過ごすのは、実に久しいです。

愛しいお金のためとは言え、くる日もくる日も人殺し。

そんな日々からは考えられない、ゆつたりとした時間。

「私には、少し勿体ないですね」

私に、こんな日々を過ごす権利があるのでしょうか。  
たくさんの人を殺して、それでも。

今が楽しいと思つてしまつのは、罪なのでしょうか。

「……はあ

楽しい気分から一転、憂鬱な表情。

「止めです、止め…今日はせつかくの休みなのですから、楽し  
こじとを考えましょー。」

井にお金とか！

ぐるりと、お腹から向とも言えない叫びが聞こえていました。

「…井、井ずは、腹(レ)しりえですね。うん。」

腹が減つては戦ができません。

とこり訛で、丁度ことりにあつた喫茶店に入ることにしました。

「い、こりしゃいまかー」

「……あれ？」

どこかで聞き覚えのある声。

やる気の感じられない、無気力な声。

「木葉さん？」

「げつ、イローンー？」

しまつた、と視線を反らす木葉さん。  
そんな」としても、見てしまいましたよ。

精一杯作りましたー、って感じの引きつった笑顔。

「何やつてゐんですか、金ヅルさん」

「なんか今妙な単語が聞こえたぞー。」

「氣のせこです。ビルでもここので早く席に案内してくださー、金ヅル将軍さん」

「氣のせこじゃねえし昇格してるー?」

もう、うつさいですねー。

私はお腹が減つてゐんですよ。

「勝手に席で待たせてもらひうので、何か美味しいものを持つてきてください」

まだ何か叫んでいる金ヅ 木葉さんを置いて、とつあえず席に。

少し待つていると、すぐヒオレンジジュースとサンデイッチが運ばれてきました。

「うー、なのはさんまで」

「いやせせせ。ヒー、私の両親が経営してゐるからね」

「ああ、やつこつ」とですか

サンデイッチを一口。

うん。

す」べ美味しい。

「ちなみに、私の分の料金は木葉さんが出してくれるみたいです」

「あ、そつなんだ。わかった。木葉くんのお給料から出すことですね」

「はい。もれなくお願ひします」

「うして私のお金は譲られた。

満足満足。

にしても。

本当に美味しいですね、これ。

「ねえ、イリーンちゃん」

「はい、何でしょ?」

「どうして私たちの仲間になってくれたのかな?」

「……?」

「お金を決まつてゐるじゃないですか

「……そつか

悲しそうな顔。

「ハハハハんな顔をあらのでしょ。」

「イコーンちやんば、お金よつ大事な」とつとあると黙りへ。

「あつせわさん

お金やえあれば、何でもできる。  
何でも、さう。

あの時もあの時もあの時も。

お金があつやえすれば、すぐて解決したの。

「私はね、あると黙りうんだ」

「……」

「お金よつも、ずっと大事なこと」

「参考までに、聞いておきます。それは何ですか?」

「くつ~えつと、こー……分からなこ」

「はー?」

私をからかつてこるのでしきうか。

自分から切り出しあおこて、分からなになんて。

「分からなこつてこつかね、畠葉にこくへいんだ」

「畠葉」、こくへいんだ?」

もひ、サンドイッチもオレンジジュースも無くなってしまった。

だけれど、出ていこうとは思いません。

なのはさんの言葉が、何故かとても気になつたからです。

「私はね、9歳のときに魔法の力を手にするまでは、本当に普通の女の子だったんだ」

「……伺っています」

「だけどね、この力に憧れた。ずっと、使っていきたいなつて思ったの」

「憧れた、ですか」

「そう。この力のおかげで、いろんな人とお話できたから

そういうのはさんの瞳は、すごく真っ直ぐでした。  
思わず、見入ってしまうほどだ。

「どうしようもない事情を抱えて、戦うしかない人たち。そんな人たちとも、魔法をぶつけ合ってお互いや理解しあえるんだ。  
これつて、お話してるつことだよね?」

「……ええ。少し、わかります」

魔法には、使う人の想いが宿る。  
悲しみ、苦しみ、喜びや痛みまで。

きっと。

なのはさんめ、それを相手の感情として捉えているのでしょうか。

そして、自分も想いを乗せて魔法を放つ。

それをなのはさんめ、話し合いだと感じている。  
信じている。

「フハイトちゃん、はやしちゃんと仲良くなれたのも、そのおかげなんだ」

「それが、お金よりも大事なこと?」

「そんだね。あえて言葉にするなら……絆とか、繫がりって感じかな」

「……繫がり」

私は、そつま思いません。

思つません、が。

なのはさんの言葉には、何故か説得力があります。

それこそ、簡単に同意してしまってそうなほどに。

「だから木葉くんとも、もみみんイリーンちゃんとも、繫がりが持てたらす」く嬉しさ

「……」

私は人殺しです。

そんな言葉を掛けても「うるさい」資格など

資格？

優しくしてもらいたい資格とは、何でしょうか。

よく、わからない。

「おこ、なのはーーこつまで喋つてんだよー。」

「あー、『めんなさーー！』

だけど。

だけれど。

「『おこ』をまでした、なのはん」

少し興味が出てきました。

なのはんの言ひ繋がり、絆。

「案外、楽しかったですよ」

お金とはまた違つもの。

私にも、それが見つけられるのでしょうか。  
人殺しの、私にも

「また、来ますね」

そうだ。

また来よう。

なのはさん、「もっとこうぱい話をしてもうろう。

そうすれば、少しは見つかるかも知れないから。

「本当に、いいお天氣です」

その時はまた。

木葉さんにじご馳走になりましょ。

## その重み

「確かに、あつちついたきました……えへへ」

緊急召集の後、イリーンの勘定作業が開始された。

終始口を吊り上げ、数字をつぶやく光景は壮絶なものであった。

やつとだ、とクロノはため息。

「これで、話してもうえるんだな?」

「もちろんです、」主人様

なんか昇格した。

「……いや、今まで通りで構わない」

「そうですか。任せのままに、クロノさん」

お金は怖い。

ともう一度言つてしまつ。

クロノは一度木葉たちの方を向き、木葉たちは頷きで応えた。

「ではまず、【管理局の管理者】についてもつと詳しく述べておきたい」

「はい。前にも言つた通り、そんなものは存在しません。依頼主だ

つた方にかねて乗るまいじてござりました

「何の理由は？」

「詳しきは聞いていませんが、なほせんたちを殺すための奴だ  
そつです」

「一言一句を思ひ出すように、イーレーンは口を閉じたまま語る。  
風に語り掛けようが、妙らかな顔で。

「前にも書いた通り詳しきは分かりませんが、なほせんたちは後  
々の計画に支障をきたすから、ついでに始末しておいた。と」

「つこでひつて……」

その発言は、なほせんたちは絶句した。

そんなに理不眞に、身勝手に、あつせつと人を殺せるものなのか、  
と。

「驚くのも無理はありませんが、私はそつこつ世界でずっと生きて  
きました。やんなことが、普通の世界で」

イーレーンはまだ救いようがある、と木葉は思った。

「でも、悲しきつたは自分で自分のことを語るから。

そんな事をするのは、いかの世界に未練がある所以だらう。

「後々の計画、か。そこは今やつてこの他の何か企んで  
いるようだな」

そしてクロノは、気になった部分をハイライト記録させていた。

「んじゃ、次は俺のことだ」

「一回話を区切らせた時、名乗り出たのは木葉。どちらかといつて、今回の事件はこちらが本題だ。

「俺を狙う理由。そして、俺を殺せない理由を

その時、イリーンが息を呑むのが分かった。

触れてはならない場所に触れてしまつた。  
そんな表情。

「……『ヒロプロジェクト』」

「あん?」

不意に出た意味の理解できない単語に、木葉は露骨に不審な様子。  
それをまったく気にせず、イリーンは進める。

「木葉さんに関わる全てが、その計画に回帰、起因しています」

「ヒロD……プロジェクト?」

「今は、そうとしか

そつと、顔を伏せる。

これ以上は聞くな、といつよつ。

「言えない理由が、あるんだよな？」

「おい木葉！その女、イリーンとは契約を交わしているんだ。話せない、と言われてあっさりと納得なんて」

目の前のデスクを叩いて、クロノは激昂。彼の言い分はもつともだ。

『そういう』契約なのだから。

だが。

「クロノ。別に俺は私情で引き下がつた訳じゃない

木葉はいたつて冷静だった。  
イリーンに視線を向け、珍しい微笑みを見せる。

「契約つてのは、俺たちの仲間になることだろ？なら、その答えで正しいんだよ」

「正しい……？」

「イリーンはこう判断したはずだ。俺が狙われる理由を話せば、俺たちにとつて不利益になるつてな」

そつだる、といリーンへ問い合わせる。

彼女は応えない。

ただ懇願するような瞳で、木葉を見つめるだけ。

「例えば。内容が衝撃的すぎて俺はおろか、なのはたちの戦闘意欲まで無くなっちゃつ、とかな」

「まさか……」

「あいつの目、見てみろよ。俺はめつた人に信じないがな、今のはイリーンには信じるだけの価値があるよって思つ」

クロノは、何も言えなかつた。

木葉の言つたこと。  
イリーンの表情。

嘘ではない、と確信した。  
確信して、しまつたから。  
もつひとつはできない。

「木葉さん…… ありがとついでこなす」

「それはこいつの台詞だ。ちやんと仲間でいてくれてる」

「…………はい」

イリーンの中で、何かが芽生えた。  
そう、木葉は思つた。

「だけど、これだけは聞かせてもらひ」

一番、ずっと心の中にあったこと。

「俺の両親が　葉巻と落葉が殺されたのは、俺のせいなのか？」

この三田間の間に木葉は心を決めていた。  
どんな返答であれ、受け止めよう。  
たとえそれがやせ我慢だとしても、と。

「せつめつ申し上げますと……」

緊迫。

その場の全員から、そんな空気がひしひしと伝わってくる。  
フロイトは胸の前で手を祈るように組んで待つ。

しかし。

「正直、どちらとも言えなことです

「……なぜ？」

「どうぞ」とだ?

覚悟はしていた。

お前のせいだと明言されても、受けとめる意志が、覚悟が木葉には  
あつた。

それなりに、そんなあやふやな答えではどう対処していいのかが分  
からぬ。

「意味の取り方次第で、木葉さんのせいでもあり、木葉さんのせいではなく。ところ」とですよ」

「意味の取り方?」

「は」

そこでイリーンは一息。

今の時点では話せる内容だけを選んで、頭の中で整理する。

「『ヒロプロジェクト』。木葉さんの言った通り詳しい内容は話せませんが、その計画の中に木葉さんの両親の死は含まれていないのです」

「……よく意味が分からない」

「いえ、言い方が悪かつたですね。当初は含まれていなかった、と言つべきでした」

敵だった頃には見せなかつた、悲しい表情。これもまた、イリーンが仲間である証。

「依頼主の氣まぐれなのでですよ。両親が殺された木葉さんは、どんな反応を見せるのだろうか。楽しみだ、と」

「そんなん 一」

木葉は何も話さない。

その代わりのように、フロイトが声をあげた。

「そんな……」こと?それだけのために?」

歯を食い縛り、自分を押さえ込む。

それでもしないこと、イリーンに掴み掛かつてしまい、そつた勢いで。

木葉はイリーンを仇ではないと言つた。  
仲間だ、と。

だから、イリーンを責めることはできない。

そんなことをすれば、木葉の決心を鈍らせてしまつことになる。

この怒りの感情は、イリーンの元依頼主に向けられるべきなのだ。

「酷すがわぬよ……」

「……許せへん」

怒りを感じているのはフュイトだけではない。

なのはせ、はやても。

ぶつけよつのない怒りを、胸の内に抱いていた。

「イリーン。そこの名を。その下衆な依頼主の名を教えてくれ

そして。

もちろん、クロノも。

あくまでも冷静に。

しかし冷徹な声でイリーンに尋ねる。

クロノにとつても、木葉は仲間だ。  
歳は少し離れているが、年下とは思えない独自の思考能力を持つ木葉。

自覚はしていないが、クロノはそんな木葉を仲間どころか良き友として認め始めていた。

友を愚弄された。

クロノの怒りはそこにあつたのだらう。

「前の依頼主、彼の名はジェイル。『ジェイル・スカリエッティ』です」

「 つ、スカリエッティだと…？」

「彼を『存知でしたか？』

その名を聞いたとき、クロノの中である報告書が思い出された。  
管理局のデータベース。

その中でも、よく目にする資料。

「知っているも何も、奴はS級の次元犯だ

「

「なんもんどうでもいい」

何の反応もなかつた木葉。

相当落ち込んでいるのだろう、と誰しもがそつとしておいた木葉が、  
よつやく顔を上げた。

落胆の表情ではない。

そこには宿るまゝ、なのはたちと同じ感情。

「どうでもいいんだよ。やつがどうこう奴かなんてよ」

怒りだ。

イリーンと初めて会った時とは違う。

冷たくて、痛い怒り。

そんな木葉に、誰も口を聞けなかつた。

「今回ばかりは、面倒くせえとか言つてられねえよ」

すでに木葉には、ジエイル・スカリエットしか見えていない。  
くだらない理由で両親を殺した相手しか。

「潰して、終わらせてやる

## それぞれの決意

敵の正体が明かされてから、早一週間が過ぎようとしていた。  
ジエイルは拠点を一定期間で移しているらしく、居所の捕捉はできていない。

しかし、イリーンの証言から今までのデータを入手できたこともあり、アジトの特定にはそう時間は掛からないだろう。

以下検索中である。

なお、彼女が3日間ジエイルの下へ帰らなかつた結果、自然と彼との契約は破棄された。

初めからそういう条件だつたらしく、アジトにスペイとして送った時には既にもぬけの殻であった。

そして。

イリーン。

彼女が話した過去も、木葉たちには壮絶なものだつた。

そんな彼女が最後に言った言葉。

お金より大切だという繋がりを、教えてほしい、と。

イリーンは、一度失つたものを再び手に取る決意をした。

だから。

木葉たちはそれに応えたいと思つた。

「ストラス！」

『『shooting mode（射撃形態）』』

それぞれの想いを通して。

木葉たちは力を手にするための修行に励む。

「追撃位置補正！04：22：15” 218 °CLOCKWISE  
12」

『『all right . count 4（補正完了。追撃開始まで4  
秒）』』

木葉とストライトネスの連携効率も、始めと比べると格段に上がった。

あらゆる場所に設置されている狙撃用の目的を、持ち前の思考能力  
で的確に落としていく。

「すじいね、木葉くん」

そんな木葉を見つめながら、なのはがぽつりと言った。

「成長の早さが、普通じゃないよ」

「そやな。木葉くんの能力がうまいこと働いてるのかもしけん」

はやてもそれに同調。

艦船アースラの訓練室は一つしかないため、木葉以外は自然と外から見ていくしかなくなる。

なのは、はやて、フロイト、そしてイリーンも。この3日、木葉の訓練をただ傍観していた。

「はやてさん。木葉さん的能力と何のは？」

「ああ、イリーンちゃんは知らんかったつけ？」

【瞬時思考】つていつてな、簡単に言えば頭の回転がめっちゃ早い。そやから、一番自分に必要な力とか訓練とかも、すぐに『分かってしまつんやろな』

「……なるほどです。だからあの時」

思い出されるのは、2回目の戦い。

まったく反応しないと思えば、急に相手の攻撃を読み切った勝ちに繋がる動きを見せた。

あれは考えていたからですか、といリーンは納得。

「木葉くんの成長速度か。その力も関係あるんだろけどね」

また新たに目的を破壊する木葉を確認しながら、なのはは語る。

「決意つてのが、一番の要因だと思つよ」

「決意、ですか？」

「うん。木葉くん、理不尽なこととか大っ嫌いでしょ？絶対に入力リエッティを倒すっていう決意。それが木葉くんを駆り立ててる」

以前の木葉とは、目が違つ。何かを決意した、強い目だ。

そう、なのはは感じていた。

しかし。

「そり、なのかな？」

ずっと黙っていたこの者には、そりは感じられなかつた。

フェイト。

木葉を一番想う人物だ。

「やつぱり、木葉は無理してるよ。復讐なんて面倒くさいって口では言つてたけど、本当は違う気がするんだ」

「フェイトちやん……」

「私には、あの日がす」く怖い……遠くに行つちやいそりで、木葉がつ 壊れちやいそりで、「

きつく唇を噛み締める。怖い。

『まるで、昔の自分のような眼をしている』

一番想つていいる相手だからこそ、感じてしまつことがある。

ジョイル・スカリエットにに対する憎しみ。そして固執。それに取り付かれたようで、とても冷えた目。

昔、一度同じような経験をした故に、敏感にそれを感じ取つてしまつた。

「フロイトちゃん、しっかりして？」

「…………」

「もし、そうなつちやつた時は、木葉くんが復讐しか見えなくなつちやつた時は、フロイトちゃんが止めてあげなきゃいけないんだよ？」

「…………私、が？」

「やうだよ。木葉くんが、好きなんでしょう？」

「…………うん」

木葉が好きなこと。

何時なのはにばれてしまつたのだらつ、と考えたが、今は氣にならない。

活路を、見つけた気がした。

「そうだ。私が、木葉を守ればいいんだ」

1人の少女の想いが、堅く決まった。

それぞれの想いが交錯して。

彼らは、まだまだ強くなる。

フェイトが強く決心を抱いている頃。

訓練室の中で戦う木葉もまた、ある思考に駆られていた。

「強く、なつてやるつ 」

目的の設置物を破壊するたび、その想いは強くなる。

今より強く。  
もっと強く。

「ストラス！ラスト決めるぞ！」

『OK, my load . sword mode , stand by』

近距離戦闘と遠距離戦闘。

2つの使い分けも大分子慣れてきた。

ストライテレスの形態がトリガータイプの銃身から日本刀に移行。目の前の障害を瞬時に撃破する。

呼吸を整えながら、とりあえず一息。

「なのはーもーとランクを上げてくれー」

「ちょ、木葉くんーまだ続けるのー?」

荒い息遣いのまま叫ぶ木葉に、なのはは理解した。

フェイトの言つてゐる不安要素が、本当に木葉の中で芽生えているのだと。

「当たり前だろー短期間で強くなるには、量をこなさねえとー

強くなる」と。

木葉はそれに捉われすぎている。

一度無理をして墮ちた経験のあるなのはには、その気持ちが痛いほど分かった。

だからこそ。

止めてあげなければ。

フェイトが心配している通りだ。

このままでは、壊れてしまう。

「強くなるつて、じゃあ、何のために？」

「そんなの決まってんだろ。ジョイルを倒すためにだ！」

「ジョイルを倒す。それは誰のため？」

「だから、決まってる。俺は」

それから先の言葉がでない。

木葉が息を呑むのが分かった。

自分の中での、矛盾。

両親の仇？

違う。

それは木葉自身が否定した。

管理局のため？

それも違う。

そんなことに興味はない。

「俺は……」

矛盾している。

前後が繋がらない。  
理由が、ない。

何かのためにやつてこむ」としては、証明できない。

結局は、責任転嫁なのだ。

理不尽な出来事が重なった挙げ句、その責任をすべてジェイルに転嫁した。

ジェイルを倒すことで、自分が救われると思い込んで。

両親が殺されたことも。

イリーンの暗い過去も。

得体の知れない『J.O.R.O.プロジェクト』のことも。

ジェイルを倒すことで昇華しようとしたいた。

「今の木葉くん、フェイトちゃんが言つよつて怖いよ。そのままじや、スカリエッティを殺しちゃこそなぐらー」

また。

逃げ道を作つてしまつた、と木葉は自分を嘆いた。

ジェイルに腹が立つた。

自分勝手に他人を巻き込む奴を、許せないと思つた。

ただ、それだけの話だつたのに。

いつの間にか、自身を救おうとしている自分がいる。

「……悪い、なのは。それにフロイトも、変な心配かけたな」

強くなること。

その意志は変わらない。

「まったく、俺らしくもない」

しかし、目的は違った。

「何か気負いすぎちゃってた。俺がやるのは、裁きなんかじゃない」

制裁者なんかではないし。ましてや、神でもない。

割り切った人生。

と自己評価してきた木葉だが、それを今改めた。

両親のことは割り切てなんかいなかつた。

ジエイルが憎いのではない。

ただ、悔しかつたのだ。

力がないことが、悔しかつた。

だから今は、力を求める。

自分の意志を貫くための。  
大切な何かを、守るための力。

「なのは、勝負してくれ。俺はまだまだ強くなるからだ」

「怪我しても、知らないよ?」

木葉の表情が変わったのを感じ取ったのか、なのはもよくやく笑みを浮かべる。

「いいよ。イリーンが治してくれるし。……それに、いつかは勝つてやるから」

慣れた手付きでストライトネスを構え、臨戦体制。

それになのはも応じ、愛機のレイジングハートを起動させる。

そんな光景を、フェイトは少し落ち着いて見ていた。

「なのはに、先越されちゃったかな……」

私の仕事だつて、なのはが言つたのに。

口を尖らせるが、その表情は穏やかだった。

呆気なくなのはに吹き飛ばされる間抜けな顔の木葉を見て、あれが木葉だ、と小さく微笑んだ。

## せひなる力

男ならば。

そんな表現は今の世の中男女差別的なかもしけないが。

それでも。

男ならば、一度は憧れたことがあるだろう。

「なあ、なのは」

「ん、なに?」

「必殺技が欲しいんだけど」

「……ほえ?」

訓練終わりの夕刻。

お腹すいたなー、などとなのはが他愛の無いことを考えながら歩いていた矢先、木葉がそんなことを言い出した。

「スター・ライトとか、プラズマとか、ラグナロクとか それっぽいものが欲しいんだよ」

「言いたいことは分かるんだけど…… とりあえず聞いとくね。なんで?」

必殺技。

その響きだけで卒倒しそうなくらい興奮するものだが。

欲しい、と言われても一筋縄で生み出せるものではない。

何より、木葉には砲撃系は負担が大きすぎる。  
それに耐え得る魔力、ひいては体力がないのだ。

「イリーン戦のときに気付いたんだよ」

「気付いた?」

「ああ。俺には、決定打がない」

相手を殺してしまっては、元も子もない。  
よって、非殺傷設定は解除できない。

そうなると、今の木葉攻撃パターンでは相手を戦闘不能に追い込む手段がなくなってしまうのだ。

「でも、イリーンちゃんには1人で勝ったよね?」

「だから、あればズルなんだよ……」

ゆえに、必殺技(笑)が必要になつてくる。

一人でも戦えるために。

「ズルつて……どんなことしたの?」

「あー、あんまり言いたくなかったんだけどな。他の奴に言つなよ

イリーン戦で使つた力。

なのはを手招きし、耳元で小さく告げる。

なんとなくだが、普通ではないと気付いていたがゆえに、内緒にしていた力だ。

「え……えええ！？」

「つあー急いでかい声出すな！」

「「」、「めんなさ」 じゃなくて、そんなことできる訳……」

「知らねえよ。実際できたんだから」

両耳を塞ぎながら、少しいじけ気味に木葉。

一方なのはは驚愕で固まつてしまつている。

「本当だとしたら、何でそんなことが……でも、もしそうなら木葉くんの魔力光が白銀な理由も説明できちゃう」

「な？ズルつこだり？」

木葉たちが歩くアースラの廊下には他の局員たちもいる。

その全員が2人を妙な目で見ていくが、今はそれさえも気にならない。

「確かにね。普通じゃないよ」

「でも、それに決定力は皆無なんだよな」

「んー、そんなことないかもよ?」

なのはは戦技教導官だ。

能力の効率的な使い方。

つまり、小さな力を大きな力に変える方法など、いくらでも知っている。

「これから砲撃系を作るより、その力を巧く使えれば凄いことになるよー!」

「いや、だから。一発の攻撃力は変わらねえし、相手を氣絶させられなきゃ」

「できるよ。氣絶させられるほどの攻撃。その力でね」

「……は?」

矛盾しているんじゃ、と木葉は思った。

一撃の攻撃力は同じなのに、威力が変わるのはあるのか、と。

「隙を付けばいいんだよ」

「隙?」

「そう。思いもよらない攻撃。相手の思考の死角を狙えれば、威力は何倍にもなる」

予測している衝撃と、不意を付かれた衝撃とでは、受けるダメージは比べる迄もなく後者が大きい。

人間である以上、誰しもがその法則に当てはまる。

「理屈は分かるけど、そんな都合良く不意なんて付けねえぞ。」

「じゃあ隙を作っちゃえば?」

「あん?」

「身近にいるでしょ? そんな力を持つた仲間が」

「……そういうことかよ」

見つけた。

自分の能力を活かすさらなる力を持っている人物。

「あの子なら、木葉くんの能力に付加価値を付けられる。相性は抜群だよ。」

「よし、さっそく行ってみるか」

「つて、今から!?」

「早いに越したことはねえよ。」

なのはの手を引かれ、足音の響く廊下を軽やかに走りだす。

行く先は、木葉の希望。

イリーンの元へ。

「イリーン？ 彼女ならさつき嬉しそうに振込みに行つたぞ？」

「振込みつて……あんな大金ビ」に振込むんだよ」

「とりあえずイリーンを探しにクロノを尋ねてみたが、あいにく留守にしているようだ。」

なのははとつと、あまりに「『飯』『飯』」とつるといので木葉が帰らせてやつた。

「彼女に用事でもあつたのか？」

「まあ、幻術魔法でも教えてもらおうと思つて」

「……幻術魔法？ なんで君がそんなものを」

訝しげにクロノは問うが、どこか興味津々といった様子。

対してイリーンがいないと分かつた木葉はうなだれる様に座り込ん

だ。

「簡単に言つちまつと、弱いからだな。弱い。戦うことは、弱すがる」

「……弱い、か。なら、僕と戦つてみるか？」

「は？」

いや、クロノが言わんとしていることは分かる。

木葉が実戦に弱いことは、先のイリーン戦で実証済み。模擬戦という形で実戦不足を補おうといふことだらう。

それは分かるのだが。

「急に協力的すぎるのってか……なんか嫌な予感がするんだけど」

「何を言つている。実戦不足は実戦で補完するしかないだらう」「言つてることはもつともだけど。おまえ、まだ前のことを怒つてたつしないよな？」

「…………そんな訳ないだらう。君がフェイトに向をしようが僕には関係ないさ」

「今之間はなんだよー!?」

笑顔が逆に怖い。

とこうか目が笑つてない。

できればお断り申し願いたい木葉だが、今のクロノに逆らつだけの勇気がなかつた。

「もちろんやるよな、木葉？」

「……了解」

それから。

『あれ』が本当に実戦で使えるのか。  
試してみる機会でもある。

そんな意味も含めて、木葉はクロノと共に今来た道を引き返した。

「トランダル、セット・アップ」

『OK - boss』

「……ストライトネス、セット・アップだ」

『yes - my load』

アースラ訓練室。

2人の魔術師が対峙する。

イリーンのそれよりもずっと濃い青色。  
そして、白銀。

「木葉、君の成長も見させてもらいつ。本氣で来い」

「本氣で行かなきや、俺が死ぬだろ。ストラス、射撃モード」

日本刀からトリガー拳銃へ移行。

それを目線の高さに合わせ、銃口をクロノに向ける。

「遠慮なく、行かせてもらう。」

そのまま引き金を引いて3連発。

狙うはクロノの胴体。

威嚇射撃の場合、小さい頭を狙うよりも体を狙うほうがずっと効率的だ。

「はあつ」

クロノはそれを動くことなく、右手に携えたデュランダル一本で全て弾く。

今度は「いつの番だと言わんばかりに特攻を仕掛けるべく足を踏み出すが、そこに木葉の姿はなかった。

「 田眩ましか！」

こうじつたケースで次に対処すべきは背中。

クロノは素早く振り向くが、そこにも木葉はない。

「よく見ろよ」

下。

声は、クロノの足元から聞こえた。

「くつーー。」

駆け上がるよう振りぬかれた木葉の日本刀を、振り向くことなく後ろ手で防ぐ。

そのままつぱぜり合つ。

「どうやって、僕の足元につけ」

「どうもいつも、ただしゃがんでただけだ。おまえ、先を読みすぎなんだよ」

なんだよ

クロノが木葉は後ろにいると考えたのは、今までの戦いの経験から。

それは経験からくる勘。

だが実際には、一目で分からぬ様低くかがんでいただけ。

深い思考は、単純な見落としを増幅させてしまう。

「頭が堅いな、クロノ」

挑発しながら、バックステップで3歩。クロスレンジの距離から退いた。

(……なぜ木葉は引いた？後ろを向いていた僕の方が不利な状況だつたはず)

木葉からは攻めてこない。

まるでクロノの攻撃を待っているかのようだ。

(……なにか不具合でも生じたか？もしそうなら、一気に畳み掛ける！)

クロノは無数のシьюーターを周りに設置。

訓練を始めてまだ数日の木葉にまともな障壁は張れないだろう。

当たれば終わりだ。

そして。

「へやあつー

全てのシьюーターが木葉へ

## 熱冷まし

2人の攻防。  
1人は立つて。  
1人は倒れた。

一方その頃。

フェイトとはやてが夕食を終えたとほぼ同時、なのはが力なく食堂に姿を見せた。

話によると、木葉の相談に付き合っていたらしい。

しかし空腹に耐え切れず、抜け出してきた、と。

どうやらイローンと話をつけるために行つたようなのだが、彼女は現在留守だとフェイトは聞いていた。

そこで、そのことを伝えようとやてと共に木葉を探しているのだが。

「見付からへんなー、木葉くん」

「うふ。どこに行つちやつたんだろ?」

じへじ探しても見付からない。

クロノに聞いてみようにも、なぜか彼も姿が見えない。

「あと探してないのは……ん？」

「はやて、どうかした？」

はやてが訝しげに視線を向けるのは、ここから少し進んだ部屋。

先程後にしてばかりのはずの訓練室から、明かりがこぼれている。

「明かりは消しといたはずなのに……」

「もしかしたら木葉くん、秘密の特訓とか始めてたりするんかな」

「あの木葉が？」

「……ありえへんな」

本人の居ないところですいぶんとひどい言われようだが、これは普段の木葉が悪いのだろうか。

そうは言いつつも訓練室に入った2人は、中央付近で倒れている人物を発見した。

「え、木葉？」

まさか本当に無理な訓練を？  
と、その人物の身を案じて急いで駆け寄る。

しかし。

「木葉！木葉つ じゃ、ない？」

「どう見てもクロノくんやね」

倒れているのはなぜかクロノ執務官。

「う……うう」

彼女たちの声に反応したのか、俯せの状態から手を突いて起き上がる

「クロノ、起きた？」

「ん……フヨイト、か」

「なんでこんな所で寝てたの？」

「いや、寝てたわけじゃないんだが

木葉とクロノで態度が違います。

これも思春期の恋する乙女だからこそ為せる技だろう。

「実は、木葉と軽く戦つてみたんだがな」

「た、戦つたつて」

「ん？ってことはクロノくん、まさか負けたんか？」

「……よく分からない」

負けて悔しいといつう表情ではない。

どちらかといつど。

負けた理由が理解できない、と思案している様子。

「分からない？」

「確かに木葉を追い詰めたはずなんだ。なのに、あの時」「

詰めの一手。

無数のシユーターを展開し、勝利を確信した時。

「なぜか制御できなかつた。いつもなら簡単に扱えるはずなのに、自分の魔法が暴走したんだ」

「暴走つて……クロノが？」

「ああ。皿爆した」

「これは。

……笑っちゃ、ダメだ。」

クロノは真剣なんだ。

フェイトとまやは必死で唇を噛み締める。

「で、でも、クロノくんが魔力暴走なんて、ありえへブフオツ」

「笑うな……」

堪えきれなかつた。

「じめんじめん。ほんまに珍しい」とやから、つい

「珍しい、ね。本当にううなのかな」

「クロノ、どういって」と？

「ごほん、とわざとらしく咳払い。

今さら体裁を整えようとしているのが見え見えである。

「木葉の行動が不審だつた。まるで、なにかを狙つてているかのよう  
に」

「……クロノの魔力暴走を、狙つてた？」

「考えたくはないがな。もしそんな事ができるなら、文字通り最強  
だ」

相手の魔法を操れる。

そんな能力が存在するとしたら。

「有り得ないね」

「だらうつな。できるとしたら、何かのトリックか……何にしても、  
してやられたよ」

それでも嬉しそうに語るクロノは、やはり木葉の友なのだけれど。

「それで、木葉はどういって？」

「たぶん置いていかれた」

「クロノくん、どんまりや」

「あれは『勝った』って言えるのかな」

アースラの一室。

とは言つても、女子禁制の花園。

男子トイレ。

これではフロイトたちが見つけられなかつたのも仕方がない。

『you should have a pride. I think  
you are good job.  
(もつと誇つたらどうですか? 良かつたと思いますよ)』

思考に更けると、木葉はトイレの個室に籠もる。

直せといわれても直らない、昔からの癖だ。

「だけど、ズルには違いないだろ」

『No . i t ' s your power . (マスターの能力です  
よ。ズルじゃありません)』

今は、先程の模擬戦の反省中だ。

終わり良ければすべて良し、とはいかない。  
特に、実戦では。

自分の一手。  
相手の一手。

それだけで、状況は逆転し得るのが実戦だ。

「能力、ね。【色彩偽装】カラートリック」だったよな。おまえが付けてくれた名前

色彩偽装。

それこそが、木葉の瞬時思考に次ぐもう一つの能力。

瞬時思考とは人間が持つ能力としてはふさわしいものだったが、後  
者は違う。

色彩偽装は、言つなれば異能力。

まず、木葉には専用の魔力光が存在しない。

自由自在。

自分が思つた通りの色で魔法を構成することができる。

『I think it's a good name like mine.』

（とても良い名前です。私の名と同じになります。）

「おまえはその名前、気に入つてたんだ……」

ベースは白銀。

なぜなら、魔法を初めて生み出した原因が明りが欲しかったから。白銀は電灯として最も有効だったし、木葉も自由な色を作り出せるのが普通だと思っていた。

実戦で使用したのは過去2回。

一度目はイリーン戦。

決定打を持ち合わせていなかつたため、3つのショーターに違う色を乗せて上空に放つた。

桃色。  
黄色。  
白色。

俗に言つぱつたりをかました訳だ。

そして一度目は、先のクロノ戦。

接近戦で受け手に回った後、離れることでクロノに追いつき討ちを仕掛けさせる。

そこへ接近したときに設置しておいた青色のシューターを紛れ込ませ、攻撃の刹那に追撃。

「不意討ちが有効ってのは証明できた訳だ。クロノみたいな真面目な奴ほど、引っ掛かりやすい」

なのはの言った通り、攻撃力のない木葉の力でもクロノを氣絶させることができた。

これは大きな収穫だ。

「IJの力に幻術を重ね合わせることができるなら」

『it's a beat.  
(素晴らしいですね)』

「ああ。不意討ちも楽にできるだらうし、なにより戦闘方法の幅がぐんと広くなる」

思考終わり、と個室のドアを開け、食堂に向かう。

一応手は洗つておいた。

「さしくなるな

『but, you look funny.  
(でも、楽しそうです)』

「楽しい？ そう見えるか？」

『yes.』

「そつか。なら、やうなんだろ？よ」

木葉は変わった、とフェイトに言われたのを思い出した。

自分はこんなに感情豊かな人間ではなかつたはずだ。

魔法と出会つて。

なのはと出会つて。  
フェイトと出会つて。  
はやてと出会つて。  
クロノと出会つて。  
イリーンと出会つて。

木葉は変わつた。

変わることが良かつたのか悪かつたのか。  
今はまだ分からない。

『can you be teach Ms. Ilin?』  
(イリーン嬢は教えてくれるでしょうか？)』

「教えてくれるわ。そんな気がする」

しかし、せつといねからも止めさせてあるだらう。

だから。

また変わつていくんだらうな、と木葉は思った。

願わくは。

ここにいるみんなと一緒に。

「たぶん……金を払えば」

《 it - s so . ( です ) 》

## 並んで歩く

始まりはいつも突然だ。

きっかけは些細なこと。

突然始まるのだから、こちらはそれに順応しなければならない。  
まるで、世界に操作されているかのように。  
運命など、決まり切っているかのようだ。

「あとで。イリーンが帰つてくるまで何するかな」

あの後まっすぐ食堂に向かつた。

行つた時間が時間がだつたため誰もいなく、静かに夕食をとることが  
できた。

『shall you take a bath?  
(お風呂なんてどうですか?)』

「ああ、いいな。結構汗かいたし」

そんな他愛ない会話を交わしていた時。

目の前の空間にパネルが展開された。

「木葉!」

クロノの声。

先程放置したことに対する怒りを怒っているのかと思つたが、様子が違う。

真剣な声だ。

「見つかったか？スカリエッティのアジト」

「いや、そうではないんだが。というか、何で君はそんなに冷静なんだ？」

「気にはすんなよ。性分だ」

冷静でいられる。

そんな訳はない。

表には出さないが。

今にも飛び出したいほどに、木葉の心は騒いでいた。

「で、そつじやなかつたら何の報告だ？」

「以前スカリエッティが使っていたと思われる場所から、生体反応が出た」

「生体反応？」

「ああ。詳しい数は分からんんだが、木葉はどう見る？君の意見が聞きたい」

生体反応、と一口に言われても、そこから考えられる可能性は多大だ。

だからこそ、木葉の頭をクロノは頼った。

「……今考えられる可能性は、2つだ。  
スカリエットティってのは人体実験を中心としてるらしいから、その実  
験体の生き残りか。  
あるいは、大切な『何か』を守るために警備兵を配置したか」

「それで？」

「俺の考えだと、たぶん両方。  
せっかくの実験体を放つておくとは考えにくいから、警備兵がいる。  
逆に警備兵がいるってことは、貴重な実験体がまだ残っている。  
危険だが、調査は不可欠だろ？』

「よし。僕も同意見だ」

ならば、やることは1つだ。

まだまだ実戦に不安はあるが、今なら十分戦えるはず。

「いけるか、木葉？」

「いけ、って言ってくれよ」

「そうか。それでいい。なのはたまにもすぐに通達する。転送装置  
まで来てくれ」

胸に下げるストライトネスをぎゅっと握り締めている。

震えているのは怖いからではない。

嬉しいのだ。

やつと前に進める。

期待、と言い換えてもいい。

「風呂はお預けみたいだな」

『but, you come back soon.  
(でも、すぐ帰つてこられますしね)』

「ああ、頑張りつけ」

ここから転送装置までそう距離はない。

適当な速度で歩くつむじこ、すぐ着いてしまった。

イリーンがないことだけが気がかりだが、致し方ない。  
彼女は大切な預金中なのだから。

「木葉、なのはから聞いたよ？木葉の変な能力の話」

「変なつて言つた。つーかなのは、他の奴に言つなつて　「

「堅いこと言わないので。仲間なんだから知つてもいいでしょ？」

なぜだね？

言つてこむことは正當で純粋なのに、『文句言つた』と聞いえた気がした。

「……まあ、いいけど」

だから深くは追及できない。  
戦う前に命は失いたくない。

「確かにびっくり能力やから、不意討ちは向いてる。期待してる  
で？」

そして。

4人は転送装置に並んだ。

行く先は第39管理世界、トレジア。  
特に発展もしていない、何もない世界だからこそ『やりやすい』。

イリーンにはクロノが連絡しておいた。

「イリーンがくる前に、片付けちまおう」

「うん。いいね、それ」

「でも木葉、無理はダメだよ？」

「フエイトちゃんは心配しそぎや。木葉くんはもう一人前の魔術師  
なんやから平気やろ。な？」

「はつ 当たり前だ」

そんな4人を見て、クロノがエイミーに合図を送る。

「頼んだぞ、4人とも」

4人が笑顔でうなづくと、そこからゆりくつと姿を消した。

### 第39管理世界トレジア。

荒廃の一途を辿つてゐるその世界の一角に、それは存在した。

山の中の穴蔵に見せ掛けた研究施設。  
ジエイル・スカリエットの元アシト。

「見るからに、つて感じだな」

「うん。それに、強く感じるよ。言葉にできない、嫌な感じ」

なのはの言つそれは、どこから出でているのだろう。

警備兵の放つ殺氣か。

それとも。

居るであつた実験体の悲哀なのか。

「何にせよ、進むしかないやろ」

やつとつて先手の一歩を踏み出した刹那。

「 つ、待て、はやつ！」

ぐつとはやての手を引いて無理やり引き寄せた。

そのほんのコソマ空白の後、はやての居た場所が見えなくなつた。

否。

おびただしい数の槍が叩き込まれ、視界が遮られたのだ。

「……し、死ぬかと思った」

そのまま地面に座り込み、呆然。  
声も震えている。

「アホかおまえは。イリーンが言つてたる。奴らは人を殺すことには躊躇いを持たない。入口に何かあるのは当然だ」

「す、すまん。これで敵にも勘付かれてしもた」

「そんなもんどうでもいい。生きてさえいればな。どの道潰していく予定だつたんだからよ、探す手間が省けた。ナイスガッツ」

「……ちよつと馬鹿にしてるやろ?」

死ななければ、生きてさえすればいい。

それは潜入時の真理だ。

木葉は一旦入口から離れ、作戦を練ることにした。

「隊列は一列縦隊で進む。先頭は機動力のあるフェイト。次に俺が付いて逐一作戦をたてる。その次にはやて、後方支援。最後は防御

の堅いなのはだ

「うん。了解」

「後1つ

瞬時思考。

自分の力を理解していくからこそ、

「生きて帰るためだ。疑わず、逆らわず、躊躇わず、何も言わ

俺に従え」

すべての責任を、自分がとる。

覚悟があるから言える言葉。

「うん。それも了解」

それを分かっているからなのはたけは頷く。

木葉の決意。

ここまで一緒にやつてきた仲間だ。

分かるに決まっている。

「んじゃ、行くぞ」

そして。

彼らは進む。

ここからが始まりだ。

「すゞいね……」

フュイトがつづぶやく。

山奥の穴蔵とは思えないほどに、中は機械的な造りになつてゐる。

壁、床、天井、すべてが鋼鉄製。  
特に入り組んだ様子もなく、奥へ一直線。

多く存在する生体ポットの様なものには、何も入つていない。

「実験体つてのは、ここに入れられてた訳だ」

「みたいだね。その生き残りがもしかしたら……」

「ああ。どこにいるだろうな」

通路には先は見えない。

いつたい何処まで繋がつてゐるのだろう。

そのまま進むこと数分。

常に気を張り詰めての数分は、思つた以上に体力を消耗する。

「……そろそろか」

フュイトの肩をつかみ、歩を止めさせる。

「木葉、どうかした？」

「対人用にトラップを仕掛けるタイミングつてのがあんだよ。見てな」

軽く一つショーターをセット。  
そのまま進行方向へ飛ばすと、一瞬の光が走つて

木葉のショーターは消滅した。

「……今度は高電圧。結構古典的だよな」

当たり前のようにならう木葉に、3人は口が塞がらなかつた。

もし、ところは戦場ではあり得ないが。

それでも。

もし、木葉がいなければ。

考えるとぞつとする。

「味方が罠に掛かつてちや、元も子もないからな。こうこう無機質な罠にはある程度の規則性があるんだよ。距離だつたり、匂いだつたり、小さな目印だつたりな」

「……えっと、木葉は何でそれを？」

「面倒を避けて生きるために必要なことは頭に叩き込んである」

「…………」

木葉が生きてきた世界って普通の地球だよね?となのははたちは確認。

しかし。

それが当然、の様に言われてしまつと深く突っ込めない。

「次は二重トラップだからな。気を付けろよ」

「い、いえっそー」

つべづべ思つ。

木葉が味方でよかつた。

## 意味ある犠牲

木葉が立ち止まる場所。  
そこには多少の誤差もなく、トラップがあらゆる手立てで仕掛けられていた。

ここまででは予想範囲内。

ただ。

スカリエッティがこれで終わるはずがない。

確信にも似たそんな考へが、木葉にはあつた。

そして、警備兵の存在。

今までのトラップはすべて機械によるものであり、人為的な攻撃はまだない。

一瞬の気の緩みが命取りになる。

「……扉」

そんな中。

4人がたどり着いたのは、ただ大きいだけの飾り気の無い扉。

ここが終着点なのだろうか。

「木葉くん」

「なのは、どうした?」

「嫌な感じが強くなつて。たぶん、中に敵がいるよ」

声が聞こえた訳でも、物音がした訳でない。

ただの勘。

戦いの中で自然と身についた、魔術師としての勘だ。

「確かか?」

「うん。1人じやない、集団で」

「わかつた。ナイスだ、なのは」

ひとまず扉から下がり、体制を立て直す。

侵入と待ち伏せでは、後者が圧倒的に有利だ。

だが。

出会い頭さえ乗り切れば後はなんとかなる。

こちらには、3人のエースがいるのだから。

「耳貸せ、作戦を伝える」

扉を思い切り押し開くと、予想通り。

『 なら戦術としては、はやてを第一に墜としてくるだろ？。遠距離支援は一番隙が大きい』

「おつけやー！」

「うんー！」

「いくよ、なのは、はやてー！」

『 相手はおまえ等が来るってことは知ってるよな？有名人だし』

それを確認して、今度は木葉がフェイトに首を縦に振つて合図。

作戦決行の合図だ。

木葉の間に、3人は首を縦に振る。

「……って感じで、準備はいいな？」

そこには数十の戦士たちがいた。

『 そして俺の情報は少ない。俺の能力を知ってる奴なんぞ尙更だ』

『スプライズアンバー！』

『ディバインバスター！』

『 まずはなのはとフロイトである程度蹴散らせ』

『闇の書の主だ！白の魔導師を潰せ！』

『 そして、はやてに向かってくる敵は、』

『 残念、はずれだ』

『 男！？』

『 色彩偽装で俺が引き付ける』

数が数だ。

木葉が接近戦を鍛えてきたからといって、無傷で切り抜けられる状況ではない。

ただ。

これは、勝つための一 手。

「ぐつ 」

傷ついても。

致命傷さえ負わなければ、それは作戦としては大成功だ。

『 その後は任せたぞ、はやて』

「木葉くん！ なのはちゃん！ フェイイトちゃん！」

扉から少し離れてはやて。

詰めの一 手。

「天よりそそぐ矢羽となれ フレース・ヴェルク！」

最後に立っていたのは、木葉たちだ。

はやての長距離支援魔法。  
敵が恐れるだけはある。

「 つ 」

「木葉ー。」

しかし。

今は勝利の余韻に浸つている余裕はない。

息絶え絶えの木葉に、フロイトたちが向かう。

「そんなに騒ぐな。平氣だよ」

「平氣つて……血がつー。」

頭から腕から。

おびただしい赤が木葉を染め上げていた。

「そう思つなら早くここから出るぞ。田的も見つかったしな」

「え？」

「忘れたのかよ。危険をおかしてまでここに来た理由」

木葉たちがいる部屋はそんなに広いものではない。

進んできた通路を考えると、むしろ小さくほどだ。

その一角。  
生体ポットの中身。

30代ほどの男性が一人、目を閉じて浮かんでいた。

「「」の人……」

「知ってる奴か？」

「知ってるっていうか……管理局のエースだった人だよ。十数年前から行方不明だって聞いてたけど

書類で田を通したくらいのようだが、管理局では有名な人らしい。「詳しいことはクロノカリンドィさんに聞くか。こいつ連れで、ここから脱出するぞ」

「ちょっと、まずいな……」

思つたより血を流しそぎた。

生体ポットの中身。

生きてはいるが田を覚まさない男を背負い、木葉は舌打ち。力が入らない。

「木葉、やつぱり手伝ひよつ

「いいつて言つてんだろ。おまえ等は敵襲に全力で気を配れ」

後は「」から出るだけだ。

氣の緩みが死を招く状況下で、集中を欠く訳にはいかない。  
失敗なんてできない。

「で、でもっ」

「しつこござ、フエイト。そつこいつじてゐるひちこ  
元ちひるじてゐるひちこ」

足音。

前方から、一人ではない。

「こんな感じで、出口を固められちまつんだよ……」

一方通行の通路で一番恐れるべきはこれだ。

退路を断たれる。

狭い場所で乱戦になれば、個人の強さなど関係ない。

単純に、数が勝つ。

「圧倒的、だな」

こちらは5人。

内1人は目覚めぬまま。

内1人は歩くのがやつと。

対して、相手は10人強。

「！」、木葉ぐるり

勝敗は決した。

「落り着けよ、なのは」

かに思えた。

「俺が　仮にも瞬時思考と名を冠しているこの俺が、こんな初歩的な戦術を見過ごすと思つのか？」

「ヒルに笑う。

その表情のまま右手を上にかざし、パチンシと高らかに指をならす。

「観念しろーもう貴様らに逃げ道はヘボウッ

「た、隊ちょガフンッ

そして築かれるのは、警備兵の残骸。

たつたそれだけの動作で、木葉はこの場を制圧した。

「……木葉ぐる、ビツツヒツテ　」

「相手が退路を塞いでくるのは分かつてたんだ。だから、先手を討つておいた。奴らの背後にシьюーターをあらかじめ設置しておいてな」

10人強の警備兵たちは、揃つて意識がない。

不意討ちは強い。

なのはに言われた言葉通りだ。

「でも、そんなの気付かれちやうんじゃ……」

「そういう場面で使わなきや、何のための色彩偽装だよ」

「あつー。」

つまりは、軍隊の迷彩服と同じ原理。

ステルス。

天井と同じ色に『偽装』したシьюーターを、迷彩の要領で隠してい  
た訳だ。

「す、し……」

「ただ俺がスカリエッティなら、不確定要素を考慮してもう一つ手  
を用意する」

さらに足音。

先程とは比べものにならない。

人、人、人

10人どころではない。

奥が見えないほどの敵の数。

「……こんな風に、第一波を準備したりな」

深くため息。

「そして、これは読めても手の打ち様がなかつた」

スカリエッティの天才ぶりは、伊達ではないらしい。

裏の裏まで、しつかり読んでくる。

「私の砲撃ならなんとか」

「隙だらけだろ。俺たちが足止めできる数でもない」

「……木葉くん、次の策を用意してたりはしないの？」

「悪い。魔力切れ。ガス欠」

そんな会話を交わすうちに、敵の大群は迫つてくる。

八方塞がり。

そんな時。

「……ん？」

「「」」なつたら、一か八かで……」

「待て、はやて」

「木葉くん？」

「どうやら、その必要はな」「」

確かに感じた。

よく知っている魔力の気配。

「おまえらも感じるだろ？ あいつが来た」

「……」の魔力

「つたぐ。最高のタイミングだ。いや、最悪のタイミングか」

それが、入口の方から近づいてきているのが分かる。

よほど安心したのか、傷のこともあって、木葉は地べたに座り込んだ。

「一対多において、あいつほど使える奴はいないな

今度の足音は、間隔が小さく聞こえた。  
子どもの足音だ。

大多数の敵に埋もれて木葉たちからは見えないが、居るであつた場所から声が聞こえた。

とても、澄んだ声。

「お待たせしました、皆さん」

「……遅い」

「すみませんね」

長い黒髪に、蒼の瞳。

純白のドレス。

幻想的な蒼の光。

「入金手続きつて、意外と時間がかかるんですよ」

その後で

「あ……あああああ

ーーーーー

「ひつ、た……助けつ

」

地獄絵図。

木葉たちを今にも捕えようとしていた警備兵たちの状況は、そう呼ぶにふさわしかつた。

木葉たちには見えない『何か』に怯える彼らは、麻薬の中毒者のように見ていて痛々しい。

もちろん原因は、イリーン。

「効果観面だな、おまえの幻術」

「集団で襲つてくれるしか能のない連中程度にて、見破られる私ではありますよ」

むべなるかな。

11歳とは思えない自信。

時々、この子は「ン的な存在なんぢやないかと思つときがある。

「木葉さんでさえも、1回目は騙されましたしね」

「……まあな

イリーンだから。

彼女だからこそ、簡単に騙される。

「こんな少女が  
こんな子供が

そんな焦りが、さりに焦りに拍車をかける。

「いつたい……何をした、小娘？」

「なんだイリーン。漏れがあるぞ、漏れが

「いくらなんでも数が多くすぎですよ。徐々に墜とす予定です」

イリーンの力は幻術。

実際には存在しないものを見せる力であるため、木葉たちには見え  
ていない。

ゆえに、イリーンが操るのは 揺さぶるのは相手の脳だ。

当然数に限度がある。

「あつそ。んじやあわつたと片付けてくれ。おーい、おつかさ

ぴくつと警備兵の眉が動いた。

おつかさん呼ばわりが気に食わないらしい。

「忠告してやる。気を付けろ。この子は、空間を『操り』『ねじ曲げ』『歪ませ』、そして『支配』する」

「……何を言つたと思えば」

馬鹿にした声。

嘲笑。

木葉の言葉をまるで信じていない。

それも当然。  
嘘なのだから。

しかし、だ。  
たつた1%。

『もしかしたら本当かもしけない』といつ觀念さえあれば、そこには漬け込む技術がイリーンにはある。

「そんなことを出来る人間など、この世……こ、こ、この世にいついるはずがあああ……」

恐怖。

つい先程まで嘲りの表情だった男の顔は、見事なまでに恐怖に染まつっていた。

いつたい何を見たのだろう。

この世の終わりのような表情は、狂気に満ちていた。

「わあ、出ますよ誰れど」

それだけ言つて、イリーンは即ちと歩きだす。

そんな彼女をなのはたちは睡然として見ていた。

「イリーンちゃんつて、もしかして最強なんじや……」

「だね。イリーンは怒らせないよ」

「激しく同意や」

「帰りは早い。

特に警戒する必要もなく、なにより精神的に余裕があり、思つていたよりも早く出口に着いた。

「……死ぬ」

木葉だけは別だが。

血をたっぷりと失つてゐる上、成人男性を背負つてゐるのだ。

行きの数倍の疲労感。

「木葉、やつぱり無茶だったよ」

「ああ。俺もそう思つ」

見栄はつちやつた。  
と後悔。

「……ひ、ん？」

「しかもこのタイミングで起きるのかよ」

声が聞こえたのは木葉の背中。

もう少ししじでも早く起きて欲しがつた。  
まつたく、ついてない。

「あの……あなた、セオドアさん、ですよね？」

目覚めた男。  
すぐに意識は覚醒。

「んあ？おひ、なんだ可愛らしこお嬢ちゃん。確かに俺はセオドア  
だ。それは何よりも正しい」

この男は。

自分の状況が分かっていないのだらうか。

なのはの話によると、彼は何年も前から行方不明だったらしいのだが。

「おい、おひさん。あんた自分の状況が いてえつ」

殴られた。

「おひさんじやねえ、お兄様と呼べ小僧ーもしくはセオ兄でも可だ  
！」

駄目だ。

この男。

木葉の一一番苦手なタイプ。

「兄つて歳じやねえだろ……」

「何言つてやがるーどつかうどいつ見てもピピチの二十歳……あれえ！？ふ、老けてる！なんか老けてるぞおい！……」

馬鹿だ、コイツ。

「あー……あれだ。とにかく整理しようぜ？よーしそれがいい」

セオドア。

管理局の元エース。

「えつと、俺が行方不明になつたのがちょうど10年前で……記録では死んだことになつてる、と。んで、俺を閉じ込めていたのはジエイル」

「やつこいつ」とこなりますね

「だあつはつはあ。俺はなにか、10年眠りに就いていた王子様つてとこりかー」

「笑い事なのかよ……」

彼は地べたに足を組み、なほはたちの話を聞いていた。

この男にとっては10年の空白は許容範囲内らしく、せじて落ち込んだ様子はない。

「おい、セオドアのおっさん」

「だからおっさんって言つんじゃ……あ、ちょっと待て。今計算するから」

両手を開いて、1つずつ指折り。

「今30じゃねえか！？思つたより老けてるな。よし、おっさんでもいいだろう！」

「……いや、もひじりでもいいけどよ

馬鹿は疲れる。

面倒くさいから。

といづか。

セオドアは自分の人生を軽視しそぎだ。

「あんた、何でスカリエッティに捕まつてたんだよ？」

「ん？えつと確か……あれれ？何でだっけ？」

……耐える。

木葉は自分に言い聞かせるよつとつぶやいた。

10年間、この男は機能していなかつたのだ。  
多少の記憶不明瞭は致し方ない。

「おお、思い出した思い出した！ 噂を聞いたんだ！」

「噂？」

「そう、裏のルートから入つてきたもんだから確信はねえがよ。ジ  
エイルの野郎が、いかにも怪しい実験 もとい、計画を建ててる  
つづつな」

「……計画」

「名は『C.O.Dプロジェクト』つづたか。それを詳しへ調べよう  
と潜入したんだが……」

結局は、そこだ。

C.O.Dプロジェクト。

すべてはそこへ起因する。

この物語を終わらせるための、唯一の鍵。

「ちなみにそれ。内容がぶつ飛んでイカれた計画ですよ

」

「セオドアさん

その邂逅。

計画の内容を話し始めるセオドアをイワーンが制した。

その際、木葉に視線を送る。

まだ知るべきではない。

そう言いたいのが分かつたから、木葉は黙認。

「そこまで話される必要はありませんよ」

「ん、ああ？ そうか」

それもそつか、とセオドア。

彼なりに空氣を読んだのかもしれない。

「それじゃ、俺は行くぜ？」

「は？ おっさん、管理局に戻るんなら俺たちが仲介するぞ？」

「ばか。今更管理局なんかに戻るかよ、ばーか」

馬鹿に馬鹿って言われた。

二回も。

精神的ショックが大きすぎる。

「せっかく死んだことになつてんだ。自由に生きるぜ、俺は。余生、つてやつ？ だあつはあ！」

「……セオドアのおっさん。あなたの家族は？」

「いるぜ? いや、正確にはいるかも、か。なんせ10年前の記憶だ」

特に感慨にふける訳でもなく、事実を淡々と語る。

記憶を辿る作業、と言い換えてもいい。

「嫁さんと息子、俺が捕まる少し前には嫁さんの中に娘が一人」

「おっさんには勿体ないくらいの幸せ家族じゃねえか……何で戻らない?」

「言つたろーが、俺は死んだ人間だ。今さらしゃしゃり出るなんざ

「めんだ」

「家族はあんたを迎えてくれるだろ?」

「それでも、だ。帰るにしても、まだ何も終わらせねえだろーが」

それだけ言つて、セオドアは皆に背を向けた。

「俺の仕事を終わらせる。独自のルートでジョイルの野郎を見つけてやるよ。お仕置きだ。だあはははあ!」

豪快に高笑いし、足を踏み出す。どうやら、本当に済えるらしい。

それを見て、

「おっさん!」

珍しく、木葉が大きな声をあげた。

「俺たちも奴を追つてるんだ。すぐに、潰してやる。だから

「……」

「遅れて来んなよ？」

そこで。

セオドアはククッと堪えるように笑った。

不意に出でてしまった。

そんな笑い方で。

「小僧、気に入った！」

「木葉だ。小僧じゃない。神崎木葉」

木葉、と田の前の少年の名を反芻し、飛び上がる。

「俺はセオドア。セオドア・ランスターだ」

それが礼儀だと詫つよう。彼も名を名乗り、

「今度会つ場所は決まったな、木葉」

高く。

空に消えた。

少しずつ。

ほんの少しずつ、人は支え合って生きる。

補い合って生きる。

それが人の本質ならば。

守るために力は、どれほど強いことだろう。

セオドア・ランスター。

彼の話をクロノに詳しく聞いた。

どうやら元ヒースというのは本当にしく、様々な逸話が存在している。

曰く、ナイフ一本で強大な犯罪組織を壊滅させた。

曰く、頭突きで戦艦を数十墜とした。

曰く、眼力で人を殺した。

いくつかはただの噂なのだろうが、それでもセオドアの異常さが伺える内容だ。

それからもう一つ。

セオドアの奥さんと息子。

その2人はもうこの世にいない。

息子 ティーダ・ランスター。

彼が亡くなったのは、ほんの数週間前だそうだ。

「おっさん……あんたは、尚更消えるべきじゃねえだろ」

残されたのは10歳の娘1人。

彼女を守るのは、セオドア・ランスターの役目だ。

「早く終わらせねえと。……セオドアのおっさんを、娘のところへ戻さなきやならねえ」

新たな目標ができた。

木葉自身のため。

そして。

セオドアの娘。

ティアナ・ランスターのために。

ジェイル・スカリエッティを捕える。

「イリーン、いるか?」

「どうぞ、入ってください」

イリーンの個室。

何もない簡素な部屋。

「話はなのはさんから聞きました

木葉をベッドに座るよう促しながら、イリーンは扉を閉める。

「強くなりたい。理由はそれだけですね？」

木葉は頷く。

そう。

それだけだ。

「辛い修行になりますよ？」

「分かつてゐるや」

「いいえ。たぶん分かつていません」

隣に座る。

シーツが軽く沈んだ。

「幻術魔法　特に相手の脳に作用する魔法は、激しく魔力を使います」

質より量。

イリーンの膨大な魔力量を持つてこそ、今日のような使い方ができ

る。

「木葉さんの魔力量では1人が精一杯。それさえも普通の状態では難しいのです」

イリーンには、分かつていた。

そうやって脅してみても、木葉が諦めないことを。

隣に座つて。

木葉の目を見て。

そう、思つた。

「それでも、やりますか?」

だが。

敢えて聞いてみるとにした。

木葉の口から。

木葉の言葉から。

意志を確認したかった。

「やるよ」

それに対し、木葉は当然のよう答える。

「理由が増えたんだ。どうしても強くならなきやならない、理由が

ベッドから立ち上がり、イリーンと向かい合つ。

意地。

根性、と言い換えてもいい。

強くなる。

その意志は、木葉が前へ進むための第一関門だ。

「私に逆らわない。これが条件です。いいですね？」

「了解だ」

「よろしいです。先程、普通の状態では難しいと言いました。それではどうするか。『普通ではなく』すればいいのです」

「普通ではなく？」

「相手を、ですよ？そのためには」

「感情を揺さぶる、か」

「……流石木葉さん。優秀です」

幻術とは、結局のところ相手の脳の伝達回路 為だ。

シナプスを操る行

相手の感情をあらかじめ揺さぶっておけば、そこに割り込む隙が大 何でもいい。

あへなる。

「木葉さんは、瞬時思考 話術があります。それで相手の感情を乱す」ことができれば「ま

「付け入る隙が生まれる」

「ヤニ、ヒ。

「俺の得意分野だ」

「では、早速修行を始めます。まずは『一ヒーを入れてください』

「おお、何に使うんだ?」

確か昔映画で見た。

一見修行と無関係そうなもので強くなる。

なるほど。

やはり修行は「ひでないと。

「たくさん話して喉が渴きました」

「私用かよー?」

本当に無関係だった。

『「私に逆らわない。これが条件です。いいですね?』

「了解だ」『

「あれ？さつき『バイスに記録しておいた会話が勝手』」

「うへへ」。

歳の差4つ。

奇妙な先生と生徒の関係が誕生した。

「だーかーらー、もつと『』うガーッと……分かります？」

「『』、こんな感じか？」

「違うんですねー。『』が違つかと言いますとね、なんか、うん違います」

「……まつめりしろよ」

『』「私は逆らわない。これが条件です。いいですね？」

「了解だ」『

「あれれ？さつき『バイスに記録しておいた会話がまた勝手』」

「…………」

同じ方向を向いて、木葉とイリーンは前後に並んでいる。

イリーンは前。

木葉は後ろ。

そして木葉の両手は、イリーンの体に伸びていた。

「ほら、もっと強く。そういう、その調子です、木葉さん」

教師と生徒。

ロリコン。

様々な世間的に危ない問題に引っ掛かりそうな発言だが、そうではない。

手が触れているのは、肩だ。

イリーンの小さな肩。

つまりは肩揉みの真っ最中だ。

「……子どもが肩凝るかよ、普通」

「口答えしないでください、この奴隸が」

「降格してみるぞ!？」

「つるわー。もう敬語も無しだね。奴隸どじ主様だもん。むしろ

敬語使え

「ふてぶてしい!」

キャラを放棄しやがった。

れて。

一 念言つておくが。

これは私用ではなく、修行の一環だ。

肩揉みと言つても、木葉は手を動かしていない。

魔力の放出だけで、気持ち良くなせてみよ。

それがイリーンの出した第一の課題。

「いい？ 幻術魔法の強さは魔力精度とイコールなの。これくらいできなきや、お話になんないよ？」

「だから頑張つてやつてんだろ？」

「ん、結構気持ち良くなつてきたね」

本当に。

11歳で肩凝りとは。

人生を無駄にしている気がする。

セオドア・ランスター並みに。

一方。

探し人。

ジエイル・スカリエッティ。

彼はある次元世界にひつそりと存在していた。

「『シードプロジェクト』。実験体2号はひどい失敗作だったが…  
1号、神崎木葉は順調のようだ」

フフッと不気味に笑う。

「『』の調子でいくと、『』の3号は必要ないかな。 そうは思わないかい、月城？」

1つの生体ポット。

その中には5・6歳ほどの少女。

『それ』を眺めながら、スカリエッティは隣の青年へ話し掛けた。

「僕は、そうは思いませんね。神崎木葉。あれも失敗作ですよ」

「クククッ、酷いことを言つじやないか。一応私の傑作なのだよ?」

「その割には警備兵」ときに手こぼりすぎです」

先程の木葉たちの戦い。

彼らはそれを、観察するように見物していた。

「だが、突破してみせた」

「イリーン。彼女の力ですよ」

「それも計算の内だよ。彼女も未だ、私にとつては駒だ」

「敵に回つても、ですか？」

「違うな。敵に回つたからこそだ。彼女は本物の修正者なのだよ。神崎木葉を導くね」

「……まったく。あなたは恐ろしい。何を考えているか、全く分からぬ」

月城、と呼ばれた青年は、軽く嘆息。

「なら、私たちもあなたの駒ですか」

「どうかな。君たちの働きには期待しているよ」

それだけ言つて、スカリエッティは姿を消した。

大方、研究の続きなのだろう。

1人残された月城は、生体ポットの少女を見上げる。

「あなたも、【決定事項】なんですかね」

そのつぶやきは、誰にも捉えられていない。

## 最悪の始まり

そろそろ始めよつ。

アースラの一室。  
フェイド・ト・ハラオウンの個室。

その部屋に人影は2つ。

部屋の持ち主であるフェイドと、そしてイリーン。

そんな珍しい組合せで、2人はテーブルに向かい合つていた。

「それで、木葉はどんな感じなの？」

「いい感じですよ。木葉さん、飲み込みが早いです」

「瞬時思考、だね」

「ですね」

廊下でばつたりと出会つただけの2人。

普段なら軽く挨拶する程度なのだが、そのまま話し込んでしまい現在に至る。

話題の共通項は、神崎木葉。

「イローンは、どう思つ?」

「どう、とは?」

「木葉の力のことだよ」

それぞれの手元には、ホットミルク。香ばしい薫りが立ち込める中、フェイトが真剣な面持ちで切り出した。

「瞬時思考、これはまだ分かる。だけど、色彩偽装。この能力は

「

「異常、ですか?」

「……ひ、……わ。異常、だと想つ」

『気にしないようにしてきたこと。

しかし、考えずにはいられなかつた。

なんとなく、気付いていたからかもしれない。

木葉は。

神崎木葉は、自分と『同じ』なのではないか、と。

「……時々鋭いですよね、フェイトさんは。本当に時々ですが」

「2回言わなくても……」

「あなたの考へていいことで、たぶん正しいですよ」

「え？」

ホットミルクを一口。  
まるでそう質問されたことが分かつていてかのよひと、落ち着いて  
答える。

「木葉さんは、あなたと『同じ』です」

「なつ……じ、じゃあ……」

「クローンとは少し違いますが、フェイドさん同様人工生命体……  
いえ、違いますね。『弄られた人間』という表現が的確でしょう」

「……何で、急に教えてくれる気になったの？」

CODプロジェクト。

その内容はイリーンによって伏せられていたはずだ。

その、理由は

「私たちのために、だよね？」

「……あなたなら

自身のコップを持つて立ち上がる。

おかわりだらうか。

台所へ向かいつつ、イリーンは話を続ける。

「フロイトさんなら、受け入れてくれると思ったからです。真相も、木葉さんも」

よく見てくれている、とフロイトは思った。

イリーンを仲間として認識するようになつてから、そういう経つてないが。

それでも、彼女と仲間で良かつた、と。

だから。

ホットミルクを注ぐイリーンの背に、ありがとうと少しあづぶやいた。

「色彩偽装。あれはおそらく『シオロッププロジェクト』の副産物です」

「副産物つてことは、あの力を作りました、つてことじやないんだね？」

「はい。木葉さんの能力はどちらも偶然の力です」

「……生み出したのは、スカリエッティだよね？」

「です。彼の最高傑作だそうですよ」

そつ言いながら台所から戻つてくると、手に持つたコップをフロイトの前に置いた。

「今話せるのは、ソリマエですか」

そのまま座ることなく、扉に手をかける。

「ひつやひ、ミルクは元々フロイトのために入れてきたりしご。

「ねえ、イローン」

最後に。

もう一つ聞いてみたことがあった。

「なのはが言つてた」と、覚えてる。

「……お金よりも、大切なもの

「アヒ」

いつからだらひ。

イローンが屈るのが当たり前になつていていたのは。

「今のイローンなら、分かるんぢやないかな?」

「……」

「それでなくとも、見え始めてはこると黙ひよつ。」

「……はい。なんとなくですが、それは分かります」

「やつか

「どちらからともなく微笑んで。

その笑みを残したまま、2人は別れた。

「おーい木葉。幻術修行の第一段階、始めるよ?」

「ついに呼び捨てになりやがったか」

翌日の訓練室。

広い場所が必要になるとのことでの、ここに移動してきた。

「えっと……イリーンちゃん?」

「何で私たちまで……」

「ここに呼んだんや?」

木葉組全員集合、的なシチュエーション。

5人がそろって訓練室に呼び出されていた。

「第一段階には、なのはさんたちの力も必要なのです」

「どうしてとかな?」

「実は第一段階とは、同時に最終段階でもあるのですよ」

その発言に、木葉たちが呆気ことられた。

修行開始からわずか2日。

こんなにも簡単に修得できてしまつものなのか。

「簡単じやないんだよ、木葉。本当なら最低一年はかかる作業なの」

「なら、なんで」

「木葉が望んだからだよ。早く強くなりたい、つて」

「あ……」

「それに、スカリエッティとの戦闘も近いから。ちんたらしている暇ないの」

望んだから。

イリーンは木葉の期待に応えようとしました。

そんな中、フロイトの雰囲気が変わる。

「木葉。なんでイリーンが敬語じやなくなつてるのかな?」

「は?」

「は?じゃなくて。何でか聞いてるの」

声に抑揚がない。

木葉にはその理由が分かつていた。

怒つている

理由は分からぬが、田の前の少女がとりあえず恐かつた。

「そりや、イリーンが師匠みたいなもんだからつて。こいつが勝手に……」

「……木葉がたぶんかしたんでしょ？」

「なんでだよー。」

びつやひ。

木葉にシリアスは似合わないらし。

それも彼らしいのだ。

「……のわけてる場合じゃないんだよ、木葉」

「のわけねえよー。」

「とにかく。この第一段階は荒療治。死なないでね？」

イリーンは右手を木葉の頭にかざした。

今までとは違う、真剣な表情。

そう言つて。

「死なないでつて 何すんだよ?」

「ふう、と一息。

目を閉じて、手のひらに魔力を集中させる。

「幻術魔法は脳回路の操作。それを木葉自身で味わつてもうひ

「なつ」

「ただし、もちろんそれだけじゃ幻術魔法を使えることはないうい

幻想的な蒼色の光。

それが、徐々に木葉の頭に浸透していく。

「食むよ!」  
じつへりと。

「だから、じびつたりを味わつてもいいひみつ?」

「じびつ、たり?」

「木葉の記憶をDNA単位で探つて、一番辛い記憶を延々見てもうう」とになると思つ

「それつて……」

「一番辛い記憶。

言つまでもなく、両親の記憶だらけ。

それを、延々

「それもあると想つたが……」

歯切れ悪く話す。

こんなイリーンは初めて見た。

「たぶん、それだけじゃないよ

そこで一回話を区切る。

魔力を集中させるためか。

それとも、余程言いくことなのか。

「イリーンちゃん。なら、私たちが呼ばれた理由は？」

なのはとはやで。

彼女たちはただ立つていただけだ。

話を聞くかぎり、力が必要になるとも思えない。

「……始めれば分かりますよ

と、イリーンは敬語で言った。

その刹那。

「があつ あ、ああああつ！…」

衝撃的な叫び声。

木葉だ。

「なん、だつ……急に、頭がつ

とびつきり。

イリーンはやつひ言つた。

今までのものとは、比べものにならない。  
比べることなど億劫なくらいに。  
全身に、全神経に衝撃が走る。

「木葉。私の予想通りなら、あなたが見ることになるのは

」

そこじだ。

記憶が途切れた。

## そして夢を見る

暗闇から目覚めても。  
目を開けると、そこは暗闇で。  
だけれど。

そんな闇の中でこそ。  
一筋の光が鮮明に輝く。

巨大なビルが立ち並ぶ魔法都市。  
管理局の人物なら大抵は見知った土地であろう。

第1管理世界『ミッドチルダ』。

「なんだよ……」

イリーンは言った。

木葉の一一番辛い記憶を延々見せられる、と。

しかし。

木葉はミッドチルダなど『知らない』。

「嘘をついたつてことは、ねえよな

ない。

それは言い切れる。

イリーンは「んなとこひでふざけられたる人間ではない。

「だとすると、俺の記憶じゃないのが紛れ込んだ……え？」

思考の最中。

木葉の足は、意志とは無関係に勝手に進み始めた。

止まらない。

「おい、なんで…ひよ、待て。そつちは

「

そつちは、道路だ。  
普通に自動車が行き交つ、一般道。

そのビル真ん中で、木葉の足はようやく止まつた。

「……ははっ。なんでここで止まんだよ。そのままじや

「

視界に捉えたのは、一台のトラック。

こちらに気付いたのか、急ブレーキの音が甲高く響き渡る。

「死んじまつじゃねえか」

刹那。

すべての動きがスローモーションになつた。

動けないのは依然変わらない。

トラックが正面から、衝突した。

爪が剥がれて指が千切れて手首が飛んで腕が消えて喉が破壊され舌がむしられ鼻が目が耳が脳が肺が胃が

「イリーン。さつきの言葉、どういう意味？」

訝しむようにフェイト。

木葉は幻術の状態に入り、眠ってしまった。

「…………」

「木葉が見るのは、2000人分の死の記憶だつて……」

「『CIOOプロジェクト』の一端。とだけ言つておきます」

今の幻術で大分魔力を消費してしまったのか、イリーンは力なく地面に座り込んだ。

「そんなことより、始まりましたよ」

「え？」

木葉が動いた。

脈打つように、ビクンと大きく。

「あああああああっつ　　ーー！」

そして咆哮。

自分の爪で、自身の体を傷つけ始めた。

「木葉くんっー!?」

なのは、フロイト、はやて。

それぞれ木葉を必死に押さえ付ける。

「たった今、木葉は一度死にました」

イリーンが付け加えるように一言。  
幻術の中で、ということだらう。

「それを……後1999回　　？」

「私の知っている限りの情報では、そうなります。あなた方を呼んだ理由、分かりましたか？」

「……木葉くんを、暴れないように押さえ付ける」

「です。死なない程度にお願いしますね？」

「……俺は、死んだんじや？」

見たこともない土地だ。  
といつか、建物だ。

木葉はビルの屋上にいた。

「……ちょっと待て。さつきと同じ感じになるとしたら  
ひたすら」

勝手に一步。  
また、一步。

進む先には何もない。

下の地面まではかなりの距離がある。

「やつぱり、いつなるのかよ……」

浮遊感。

それもすぐには消え、重力の為すがままに降下。

どうするにしてもできや。

一度目の、死亡。

死の連鎖は終わることを知らない。

溺死  
圧死  
焼死  
感電死  
出血死  
窒息死  
凍死

「はあひ、はあひ……フハイテヅヤん、せやしつやん。これで何回

？」

「た、たぶん1000は越えたよ……」

「ふう……後半分、か。私たちの体力が心配やわ

イリーンは睡眠中。

余程疲れたのか、いつの間にかすやすやすと眠っていた。

そんな彼女が眠る前に言った一言。

それが、なのはたちには気掛かりだった。

木葉には、自分の存在の大きさを分かつてもらわないといけないのです

神崎木葉。

彼は一体、何者なのだろ。

「……ん、あ」

「あ、起きた？」

すっかりお馴染みになってしまった、アースラ医務室。

一番奥のベッドは木葉専用と言つても差し支えないほどだ。

「……フエイト？」

「うそ」

そしてこの組み合わせも、同様にお馴染み。

周知。

「どうのくらご寝てた？」

「15時間つてところかな」

「なんだ。そんな、もんか

疲労感は、明らかにそれ以上のものだった。

現実と夢の違い。

精神の疲労は意外と簡単にとれるものらしい。

もちろん、人によるのだろうが。  
木葉にはそう思えた。

「俺が見続けたのは、死の瞬間。死の記憶だった」

「本当に、見たんだね。イリーンがそう言つてたんだけど、信じられなかつたよ」

「きつかり2000人だつたよ

「……数えてたの？」

いや、と木葉は否定するよつに首を横にふる。

寝てゐる時にかいた汗が、額から首筋へ流れ落ちる。

「100回目あたりから、数えるのを止めようと思つた。辛いだけの作業だつたから、何も考えずにいたら終わるだらうつてな」

「……うん」

「だけど、無理だった。いくら死んでも、いくら身体中が吹っ飛んでも、慣れなかつた。……今でも、一つ一つを鮮明に思い出せるべらつに」

人間は学習できる動物だ。

それは『慣れ』という形で昇華される。

が、しかし。

死は人間である以上最終地点であり、そこから先は存在しない。

慣れると言つ方が酷なのだろう。

「なんで俺の記憶にあんなもんが、なんて聞いても教えてくれねえんだらうな」

「たぶんね」

フロイトさんと『同じ』です

イリーンに言われた言葉が頭をよぎつたが、これも木葉には言わないほつがいいのだろう。

イリーンはフロイトが告げ口しないと信じて、真実を語つた。

信頼には、信頼で応えるべきだ。

「やつぱり、怖い？」

「……ああ。怖いな

驚いた。

てつかり、即答で否定するのだと思っていたから。

「自分が何者なのか。これからどうなるか。……そんなことじやない

こんなに弱々しい木葉を見るのは、一度目だ。

2人で誓い合つた、あの夜以来。

「真実を知つたとき。俺は『木葉』なのか？おまえの知つてゐる神崎木葉のままで、こゝられるのか？」

あの時は一緒に泣いて。

最後には、笑い合つていられた。

そんな繋がりもすべて消えてしまいそうで。

「俺はそれが、とてもなく怖いんだ」

「木葉……」

そうなるやうにしてくれたのは、木葉だ。

不器用に、力強く、そして優しく。

「平氣、だよ」

だから今度は私が支えよう。  
少しでも、木葉の力になろう。

フェイトは強く、そう思えた。

「木葉は、木葉なんだから。心配しなくとも」

「それでも……」

フェイトの言葉を遮る。

「それでも一番怖いのは、……フェイト。おまえを好きなこの気持ちまで、消えちまつんじやないかってことなんだよ……っ！」

「 」

好き、と。

面を向かって言われたのは初めてだ。

しかし、彼女は動搖しない。

なぜ？

フェイトも、同じ気持ちでいるからだ。

「木葉。いい方法があるの」

「いい、方法？」

「うん。なのはに教えてもらった方法。大切な人を、失わないため

の魔法」

そう言つて笑う彼女は、何よりも魅力的だった。

木葉が見てきたものの中で、何よりも。

「名前を、呼ぶんだよ」

「名前を……」

「もし。万が一木葉が自分を見失つちゃつた時は、私が名前を呼ぶ。大好きな木葉の名前を、何度も、何度も呼ぶから」

「…………」

「だから、木葉も呼んでね？私の名前。たぶん……ううん、絶対。それで大丈夫だから」

「……本当かよ？」

「本当だよ。私はその魔法で救われたんだもん」

「なのはに、か？」

「うん」

大丈夫。

彼女がそう言つてくれるだけで、安心する。

惹かれた弱みだ、と木葉は思った。

「……その時は、頼むよ。フェイド」

「任せて。木葉」

新たな誓い。

良き友達だった2人の関係はなくなった。

それよりもずっと深い、強い想いで。

2人は結ばれることになった。

ただ、それだけの話だ。

翌日明朝。

昨日と変わらない朝。

神崎木葉は、アースラから姿を消した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9960x/>

---

奇跡の法則

2011年11月20日04時11分発行